

# 百間川沢田遺跡

—原尾島ポンプ場建設工事に伴う発掘調査—

2004

岡山市教育委員会



島状高まりと畦畔



弥生後期水田遠景

## 序

わたしたちの岡山市は、温暖な気候、肥沃な土地柄に恵まれ、古代社会において中枢地域の一つでありました古代吉備国を中心的地域として、古くから人々の営みが繰り返され、発展してきた地域です。市内にはそれらの人々の営みの跡である文化財が、数多く残されています。岡山市教育委員会はこれらの文化財の保護と、現在の私たちの営みである、都市開発あるいは地域開発との調和をはかるために、各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して、有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して、鋭意取り組んでおります。

このたび報告いたします百間川沢田（原尾島ポンプ場）遺跡は、備前南部を代表する百間川沢田遺跡の南部に位置し、原尾島ポンプ場建設計画に伴い、平成四年度に記録保存を実施したもので、広範囲に広がる弥生時代後期の水田をはじめ、弥生時代を中心とする遺構・遺物を確認することができました。

発掘調査の成果は、対策委員の諸先生方、関係者各位、発掘調査参加者のご指導、ご支援の賜物であり、みなさまがたをはじめ調査担当者各位に対しまして心から謝意を表する次第であります。この調査の成果に関しましてはご検討、ご批判をいただき、少しでも岡山の歴史に寄与できるならば、幸いに存じます。

平成16年3月

岡山市教育委員会

教育長 玉光源爾

## 例　　言

- 1 本報告は、岡山市教育委員会文化課（当時）が、平成4年9月1日から平成5年3月31日にかけて実施した、岡山市原尾島ポンプ場建設工事に伴う、岡山市沢田37-1他の発掘調査に関するものである。
- 2 本報告の作成は、岡山市教育委員会文化財課が実施し、その執筆は文化財保護主事河田健司が担当した。
- 3 遺物の実測・トレースは、河田と山元尚子が行い、写真撮影、編集は河田が行った。
- 4 訳、参考文献は各章ごとにあげた。
- 5 本書で用いる高度は標準海拔高度である。
- 6 本書で用いる方位は、図2・3は平面直角座標第V系の座標北であり、そのほかは磁北である。
- 7 本書で用いる記号「Fe」は鉄分、「Mn」はマンガンである。
- 8 図3で用いた遺跡の名称、範囲は、『改訂 岡山県遺跡地図 第六分冊 岡山地区』 岡山県教育委員会 2003によった。
- 9 出土遺物および本書で用いた写真、図面類は、岡山市埋蔵文化財センター（岡山市網浜834-1）にて保管している。

# 目 次

序  
例言  
目次

## 第1章 調査の経緯と経過

第1節	調査の経緯	1
第2節	調査組織	1
第3節	調査の経過	2

## 第2章 調査の結果

第1節	位置と環境	4
第2節	調査の概要	7
第3節	調査の結果	

第1項	本体・配管部分調査区	7
第2項	道路部分調査区	25

第3章	まとめ	33
-----	-----	----

## 報告書抄録

## 写真図版

## 図・表目次

図1	百間川沢田遺跡の位置	2
図2	調査区位置図	3
図3	周辺の主要遺跡分布図	5
図4	調査区グリッド図	7
図5	ポンプ場本体部分南壁土層断面図	8
図6	ポンプ場配管部分南壁土層断面図	9
図7	本体・配管部分弥生時代後期水田面平面図	10
図8	島状高まり1出土遺物	11
図9	島状高まり1土層断面図	11
図10	島状高まり2土層断面図	12
図11	島状高まり3土層断面図	12
図12	島状高まり4土層断面図	13
図13	島状高まり5出土遺物	13
図14	島状高まり5土層断面図	13

図15 洪水砂直下・水田耕土中出土遺物	14
図16 溝1・2平・断面図	14
図17 本体・配管部分弥生時代後期～前期面平面図	15
図18 溝3平面図	16
図19 溝4・5・6平・断面図	16
図20 溝7平・断面図	17
図21 溝8平・断面図	17
図22 溝9・10平・断面図	18
図23 溝11平・断面図	18
図24 P1平・断面図	18
図25 P2平・断面図	19
図26 P3平・断面図	19
図27 P4平・断面図	19
図28 P5平・断面図	20
図29 P6平・断面図	20
図30 P6出土遺物	20
図31 P7平・断面図	20
図32 P7出土遺物	20
図33 P8平・断面図	21
図34 P9平・断面図	21
図35 P10平・断面図	21
図36 P10出土遺物	21
図37 P11平・断面図	21
図38 P11出土遺物	21
図39 P12平・断面図	22
図40 遺構に伴わない遺物	22
図41 本体・配管部分弥生時代前期以前面平面図	23
図42 P13平・断面図	24
図43 P13出土遺物	24
図44 遺構に伴わない遺物	24
図45 その他の遺物	24
図46 道路部分東調査区南壁土層断面図	25
図47 道路部分東調査区弥生時代後期遺構面	25
図48 道路部分東調査区弥生時代後期～前期遺構面	26
図49 溝1平・断面図	26
図50 道路部分東調査区弥生時代前期以前遺構面	26
図51 P1平・断面図	27
図52 P1出土遺物	27
図53 道路部分中調査区南壁土層断面図	27
図54 道路部分中調査区古墳時代以降遺構面	27
図55 溝2平・断面図	28
図56 道路部分中調査区弥生時代後期遺構面	28
図57 第24層内出土遺物	28
図58 道路部分中調査区弥生時代後期以前遺構面	29
図59 溝3平・断面図	29
図60 遺構に伴わない遺物	29
図61 道路部分西調査区南壁土層断面図	30
図62 河道出土遺物	30
出土土器観察表	31
出土石器観察表	32

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

岡山市沢田37-1他2筆、同原尾島891において、排水機場（原尾島ポンプ場）の建設設計画が立案され、岡山市下水道局より岡山市教育委員会文化課（当時）あてに、建設予定地における埋蔵文化財の存在状況について、問い合わせがあった。

これに対し文化課では、建設予定地は周知の遺跡内（百間川沢田遺跡、同原尾島遺跡）であり、建設予定地の近接地で実施されていた、岡山県教育委員会による旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査の成果および、1985年（昭和60年）に、市道百間川堤防3号線新設工事に先立って実施された周辺部の試掘調査の結果から、地下に埋蔵文化財が存在すると判断され、当該事業の実施に当たっては事前の発掘調査が必要であると、下水道局に回答した。

その結果、設計変更等で遺跡の保存をはかることは困難であると判断されたため、下水道局と文化課との間で協議が行われ、平成4年度中に建設予定地973㎡について、発掘調査を実施することで合意した。その合意を受けて、平成4年5月19日付けで、岡山市長より文化庁長官あてに、文化財保護法57条の3第1項の規定（当時）に基づき、埋蔵文化財発掘の通知を提出した。

また同年5月27日付けで、岡山市教育委員会教育長より文化庁長官あてに、文化財保護法98条2第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。

以上の経緯により、当該地の発掘調査が、平成4年8月24日から、翌5年の3月20日まで約7ヶ月の期間実施された。

## 第2節 調査組織

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長 奥山 桂
発掘調査対策委員	稲田 孝司（岡山大学文学部教授） 鎌木 義昌（岡山理科大学教授〔故人〕） 西川 宏（山陽学園教諭〔当時〕） 西原禮之助（岡山市文化財保護審議会会長〔故人〕） 間壁 忠彦（倉敷考古館館長） 水内 昌康（岡山市文化財保護審議会副会長）
発掘調査担当者	青山 淳（岡山市教育委員会文化課長） 出宮 徳尚（岡山市教育委員会文化課課長補佐） 根本 修（岡山市教育委員会文化課文化財係長）
（調査員）	神谷 正義（岡山市教育委員会文化課主任）
（調査員）	河田 健司（岡山市教育委員会文化財保護主事）

(経理) 沼 智恵 (岡山市教育委員会文化課主事)

(役職は平成4年当時)

発掘調査作業員	安倉 清博	阿部志摩子	岩城佐知子	佐藤 保	渋鍛喜代子
	谷川 正和	松本 晃	松本 勇作	松本 包房	森木千佐子
	藤田 光子	水内 涩子	三宅 信雄	山口 正康	
発掘調査現場事務員	今井万有美				
出土物整理作業員	山元 尚子				

### 第3節 調査の経過

本調査地点は、百間川沢田遺跡西端<sup>(1)</sup>に位置する原尾島ポンプ場本体部分（調査面積約790m<sup>2</sup>）、その西に隣接する放流渠部分（本書では配管部分と表記。以下同じ）（調査面積約125m<sup>2</sup>）、および本体部分の南の百間川原尾島遺跡東端に位置する、道路上の下水道管渠立坑（本書では道路部分東調査区、中調査区、西調査区と表記。以下同じ）3カ所（調査面積各約45m<sup>2</sup>）の計5カ所の調査区に分けられる。（図2）総調査面積は約1050m<sup>2</sup>である。これらは東西400mの範囲に分散している。

調査区はいずれも水田あるいは畦畔上に位置し、地盤が軟弱なため崩落の危険があり、従って調査に先立ち板矢の打設作業をおこなった。その後平成4年8月24日よりバックホーにより、配管部分の表土はぎを行った。それと並行して、機材の運搬、測量杭の設置を行った。

調査は配管部分、道路部分、本体部分の順に行い、9月1日より作業員を導入して開始した。作業は、地層を順番に掘り下げ、その上で遺構検出を行うことが中心となった。9月5日には、弥生後期末の洪水砂の下から弥生後期の水田を検出し、同22日には水田層の下から、弥生後期以前と思われる遺構を確認した。同15日には道路部分の調査を開始し、11月11日には道路部分と並行して本体部分の調査も開始した。12月9日には弥生後期末水田を、明けて平成5年1月18日以降には弥生前期～後期に相当すると考えられる遺構を検出した。同22日には対策委員会を開催し、委員の先生方から貴重なご指導、ご助言をいただいた。3月19日には、縄文時代晚期の土器を伴う遺構を確認した。その後同20日にはほぼ調査を終え、機材を撤収して終了した。

(註1)『改訂 岡山県遺跡地図 第6分冊 岡山地区』 岡山県教育委員会 2003による

#### 発掘日誌抄録

平成4年

8月24日 配管部分表土はぎ



図1 百間川沢田遺跡の位置

- 9月1日 配管部分発掘調査開始  
 10月14日 配管部分掘り上がり状況写真撮影 配管部分発掘調査終了  
 10月15日 道路部分発掘調査開始  
 11月7日 本体部分表土はぎ  
 11月16日 本体部分発掘調査開始  
 12月3日 道路部分発掘調査終了  
 12月21日 本体部分弥生後期水田面検出状況写真撮影  
 12月25日 片づけ。平成4年調査終了  
 平成5年  
 1月11日 平成5年発掘調査開始  
 1月22日 対策委員会開催  
 2月18日 本体部分弥生後期～前期造構面写真撮影  
 3月6日 本体部分縄文時代造構面写真撮影  
 3月20日 機材撤収。発掘調査終了

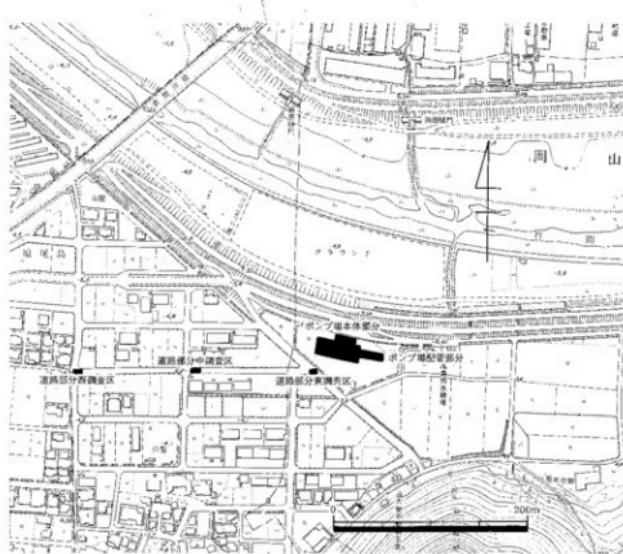


図2 調査区位置図 (S = 1/5000)

## 第2章 調査の結果

### 第1節 位置と環境

百間川沢田（原尾島ポンプ場）遺跡は、旭川東岸、下流域に形成された沖積平野上に位置する。

調査地点の北側に位置する百間川は、寛文九年（1669年）～貞享三年（1689年）にかけて、旭川の放水路として開削されたものであり、この百間川の河川敷およびその周辺部の岡山市原尾島、沢田、兼基、今谷、米田、藤原、高屋地区などには、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である百間川遺跡群が広がっており、当調査区はその中の沢田地区（一部は原尾島地区）に位置している。

調査地点周辺部における人の営みは、南に位置する操山丘陵において旧石器が採取され<sup>[註1]</sup>、また百間川沢田遺跡において縄文時代中期の遺物が確認されているところから<sup>[註2]</sup>、このころまで遡るものと思われる。しかし当調査地点の位置する百間川遺跡群において遺構の形成が行われ始めるのは、現在のところ縄文時代後期以降であろうと推測される。当調査地点の西、百間川沢田遺跡四元調査区では縄文時代後期の炉床、貯蔵穴などが<sup>[註3]</sup>、また東の同原尾島遺跡からは、焼土面が確認されている。<sup>[註4]</sup>

縄文時代晚期の遺物は、百間川沢田遺跡<sup>[註5]</sup>をはじめ百間川遺跡群内全域、あるいは北に位置する雄町遺跡<sup>[註6]</sup>などで確認されている。このことは人々の生活圏が百間川遺跡群全域およびその周辺部に拡大していったことを示していると考えられる。該期の遺構も、上記の同沢田遺跡で確認されている。<sup>[註7]</sup>

弥生時代になると、百間川沢田遺跡<sup>[註8]</sup>、同原尾島遺跡<sup>[註9]</sup>において弥生時代前期の遺跡が確認されている。また該期の水田遺構も確認されており、現在までのところ調査区周辺地域における水田耕作の開始はこの時期であると推測される。弥生時代中期の遺跡は、上記の2遺跡のほかに、百間川兼基、今谷遺跡<sup>[註10]</sup>、百間川遺跡群の北側にあたる赤田西遺跡<sup>[註11]</sup>、赤田東遺跡<sup>[註12]</sup>、雄町遺跡<sup>[註13]</sup>などで確認され、後期の遺跡はさらに百間川米田遺跡<sup>[註14]</sup>、乙多見遺跡<sup>[註15]</sup>などでも確認されている。特に後期の遺構の密度、遺物の量は中期のそれと比較して非常に多く、このことは、百間川原尾島遺跡、同沢田遺跡周辺の微高地周辺部や、低位部において確認されていた中期の水田遺構が、後期に至ると百間川遺跡群全域で確認されることと無関係ではないであろう。

古墳時代の遺跡は、上記の弥生後期の遺跡から引き続き確認されている例が多い。該期の水田遺構は、百間川沢田遺跡<sup>[註16]</sup>、同原尾島遺跡<sup>[註17]</sup>において、弥生後期の水田を埋没させた弥生後期末の洪水砂上に形成されて検出されているが、いまのところ的にはとらえられていない。調査地点の北の龍ノ口丘陵や南の操山丘陵上や周辺部、あるいは平野部の上には、備前車塚古墳、宍甘山王山古墳、操山109号墳の最古級の前方後円（方）墳をはじめとする多くの古墳が所在しており、前方後円墳は5世紀段階以降築造されなくなるようではあるが、それ以外は古墳時代全般を通じて、連綿と築造は続けられている。これらの古墳と上記の遺跡との関係は、今後の検討課題であろう。

古代、調査区周辺地域は、北に備前国府推定地および、独自の伽藍配置を持つと考えられる幡多庵寺<sup>[註18]</sup>や東西二つの塔跡が検出された賞田庵寺<sup>[註19]</sup>をはじめとする、複数の古代寺院跡が所在している

ところから、備前国の中枢域であったことが推測される。百間川米田遺跡で検出された方形の柱穴を持つ総柱の建物群の造構や、墨書き土器、石帶、帶金具などの遺物<sup>(註30)</sup>、同原尾島遺跡で出土した墨書き土器や大祓に使用されたと考えられる木製品<sup>(註31)</sup>は、この地域が他の遺跡とは性格を異にする地域であったことを示唆していると考えられ、現岡山市国府市場周辺に所在していたとされる、備前国府との関連が推測される。

中世の遺跡は、遺存状況はよくないが、百間川遺跡群の全域で確認されている。原尾島遺跡では、方形の濠に囲まれた屋敷地と思われる遺構が確認され<sup>(註32)</sup>、同米田遺跡では、大型の井戸や濠を伴う建物群が確認されている<sup>(註33)</sup>。

百間川が開削される近世は、基本的に水田の広がる景観を呈していたようで、それが現代に至るまで継続していると考えられる。



1 操山217号遺跡(旧石器) 2 操山218号遺跡(旧石器) 3 操山219号遺跡(旧石器) 4 百間川遺跡群(縄文～江戸) 5 百間川原尾島遺跡(縄文～江戸) 6 百間川沢田遺跡(縄文～江戸) 7 調査地点(ポンプ場本体・配管部分) 8 調査地点(道路部分) 9 百間川原尾島遺跡(弥生～室町) 10 百間川糞系遺跡(弥生～室町) 11 百間川今谷遺跡(弥生～古墳) 12 赤田西遺跡(弥生～室町) 13 赤田東・隅遺跡(弥生～室町) 14 雄町遺跡(弥生～古墳) 15 雄町遺跡(縄文～平安) 16 多見遺跡(弥生) 17 百間川米田遺跡(縄文～江戸) 18 備前車塚古墳(古墳) 19 穴甘山王山古墳(古墳) 20 操山古墳群(古墳) 21 備前国府関連遺跡他(弥生～室町) 22 桜多施寺跡(飛鳥～平安) 23 實寛寺跡(飛鳥～室町)

図3 周辺の主要遺跡分布図 (S = 1 / 40000)

(註)

- (註1) 錄木義昌 「第1編 原始時代」 『岡山市史 古代編』 岡山市役所 1962
- (註2) 「地理的・歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1985
- (註3) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 百間川沢田遺跡3』 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1993
- (註4) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 百間川原尾島遺跡5』 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1996
- (註5) 註3前掲書
- (註6) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1 雄町遺跡』 岡山県教育委員会 1972
- (註7) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 百間川米田遺跡4』 岡山県教育委員会 2002によると当麻調査区においても縄文時代の範囲にあると思われる土壙が確認されている。
- (註8) 『百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1992ほか
- (註9) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 百間川原尾島遺跡3』 岡山県教育委員会 1994
- (註10) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』 岡山県教育委員会 1982
- (註11) 『緋多磨寺発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1975
- (註12) 『岡山市埋蔵文化財センター年報2』 岡山市教育委員会 2001
- (註13) 註6前掲書
- (註14) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74 百間川米田遺跡(旧当麻遺跡)3』 岡山県教育委員会 1989
- (註15) 『岡山市埋蔵文化財調査の概要1996(平成8)年度』 岡山市教育委員会 1996
- (註16) 註8前掲書
- (註17) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告153 一般国道2号藤原交差点他改良に伴う発掘調査 原尾島遺跡沢田遺跡』 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 2000
- (註18) 註11前掲書
- (註19) 『史跡貫田寺跡現地説明会資料』 岡山市教育委員会 2002
- (註20) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 百間川当麻遺跡2』 岡山県教育委員会 1982
- (註21) 註4前掲書
- (註22) 註9前掲書
- (註23) 註14前掲書

(その他参考文献)

- 近藤義郎編『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987
- 近藤義郎・河本清編『吉備の考古学』 福武書店 1987
- 間壁忠彦・間壁蘿子『日本の古代遺跡23 岡山』 保育社 1985
- 近藤義郎編『吉備の考古学的研究 上』 山陽新聞社 1992
- 岡山県史編纂委員会編『岡山県史 原始・古代1』 岡山県 1991
- 岡山県史編纂委員会編『岡山県史 考古資料』 岡山県 1986
- 岡山県古代吉備文化財センター編『百間川の遺跡探検』 国土交通省岡山河川工事事務所 岡山県古代吉備文化財センター 2001

## 第2節 調査の概要

上記の調査区からは、配管部分東端および、道路部分西調査区を除くほぼ全面から、微高地上に営まれ、弥生後期末の洪水砂によって埋没した弥生後期水田が検出された。また配管部分東端からは低湿地、西側の下水道管渠立坑からは河道が検出された。検出された後期水田層の標高値は、北約300mに位置する百間川沢田（市道）遺跡の微高地上に営まれた後期水田よりも40～50cm低い。このことから、当調査地点は、東西幅400mほどの南へ傾斜する弥生時代の微高地上に位置していたと判断された。後期水田の下からは、かなり削平を受けた状態で、弥生後期水田形成以前と考えられる遺構が少數検出された。



なお本書では、百間川沢田遺跡内に位置する本体部分と配管部分を一つにまとめて、百間川原尾島遺跡内に位置する配管部分とは別に記述する。

## 第3節 調査の結果

### 第1項 本体・配管部分調査区

#### 弥生時代後期

本体部分および配管部分ともに厚さ20cm～40cmの微砂層に覆われている。(図5第25～35層、図6第13～15・23層) この微砂層中には、図示できるような遺物は確認されていないが、周辺部の調査成果から、弥生後期末の洪水砂層であると推測される。この微砂層を除去したところ、本体部分、配管部分あわせて、17枚の水田、5カ所の島状高まりが確認された。また配管部分中央付近には、南北方向へのびる大鞋が認められた。

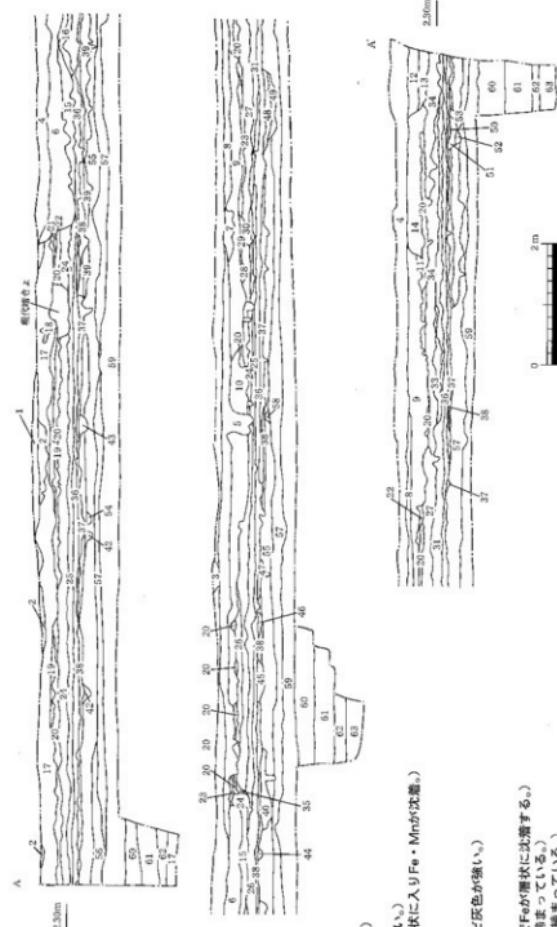
#### 水田

高さ3～5cm、幅15～25cmの断面かまぼこ型の畦畔に区切られ、1辺5～8mの方形あるいは長方形を呈し、一枚あたりの面積は、25～40m<sup>2</sup>をはかる小区画水田である。水田耕土面の海拔は、2.20～2.25m付近である。畦畔の並びは、本体部分北側では、南北に長く東西に短い傾向がみとめられる。特に島状高まりにとりつく南北方向の畦畔にそれが顕著である。

東西にのびる畦畔には、5カ所の水口状の切れ目が検出され、また水田耕土の海拔は北西から南東方向へ、微妙に低くなっていることから、今回の調査では確認されていないが、北側に存在していると考えられる用水路から、導水していたことが推測される。

島状高まり3から南北にのびる畦畔は、幅30～35cm、高さ約10cmと、

図4 調査区グリッド図 (S = 1/2000)



- 1 現代透水土  
2 現代水田耕土  
3 現代水田耕土  
4 明灰褐色細砂  
5 淡黃褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>多量に沈着する。)  
6 淡黃灰褐色 (全体にFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が沈着する。)  
7 鮎灰褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>沈着。)  
8 鮎灰褐色細砂 (かなり縛まっておりたい。)  
9 淡灰褐色細砂 (淡黃褐色細砂がブロック状に入りFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>沈着。)  
10 淡黃褐色細砂  
11 淡黃灰褐色  
12 淡黃褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>沈着。)  
13 明灰褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>多量に沈着。底部に玉るほど灰色が強まっている。)  
14 淡黃褐色細砂  
15 淡黃褐色細砂 (上面に厚さ1~2cmのFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が層状に沈着する。)  
16 淡黃褐色細砂  
17 淡黃褐色細砂  
18 淡黃褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が若干沈着する。)  
19 E白色粘質土  
20 淡黃褐色粘質土 (20倍より多く淡灰褐色粘質土の混入が多い。)  
21 淡黃褐色粘質土  
22 淡黃褐色粘質土をブロック状に含み、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が若干沈着する。  
23 淡黃褐色粘質土  
24 淡黃褐色細砂 (よく縛まる。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>多量に沈着、洪流水砂。)  
25 淡黃褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。洪流水砂。)  
26 淡黃褐色 (シルト)  
27 淡黃褐色粘質土 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。洪流水砂。)  
28 淡黃褐色細砂 (淡黃褐色粘質微砂がブロック状に入る。洪流水砂。)  
29 淡黃褐色細砂 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。洪流水砂。)  
30 淡黃褐色細砂 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性に沈着。洪流水砂。)  
31 淡黃褐色細砂 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性に沈着。洪流水砂。)  
32 淡黃褐色細砂 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性に沈着。洪流水砂。)

33灰褐色 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>沈着、洪流水砂。)

34灰褐色 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性を帯びる。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性にMn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性に沈着。洪流水砂。)

35暗灰褐色 (灰白色粘質土が帶状に入る。洪流水砂。)

36灰褐色粘質土 (河床後期水田耕土)

38暗褐色 (土中に沈着、36層の黒色層。)

39暗灰褐色 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性に沈着。)

40淡黃褐色 (沙質土)

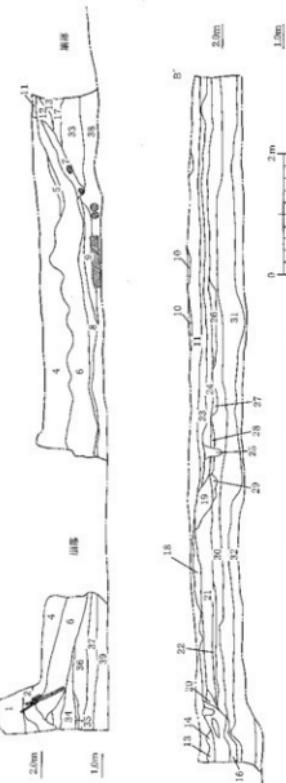
41暗褐色 (土中に沈着、Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性がブロック状に入する。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性。)

42灰褐色 (沙質土)

43無色粘土 (若干汚れており、Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>粘性に沈着。)

- 45暗灰色シルト  
46粘灰褐色土(含多量に沈着。)  
47灰褐色土(含多量に5%層の土が(多量に)覆る。)  
48暗青色青褐色シルト微砂(含3種土質Fの沈着。)  
49暗青色シルト粘土。(第3種土質成粒若干混入。)  
50灰褐色土(第1層の上部に(ごく少量)覆る。)  
51暗褐色土(含めかなり多く沈着する。)  
52黄褐色土(第5層の土が微粒に含る。)  
53暗褐色土(微細色土が微粒に、晦灰色土が帶状に混入する。)  
54暗褐色土  
55淡黄色沙質土  
56淡黄色沙質土

図 5 ポンプ場本体部分南壁土層断面図 ( $S = 1 / 80$ )



- 1 暗灰色粗砂(現代水路堆土。)  
2 暗灰色粗砂(現行水路堆土。)  
3 暗灰色粗砂(現代水路堆土。)  
4 暗灰色粗砂(晦灰色粗砂をブロック状に含む。現代水路堆土。)  
5 暗灰色粗砂(含めかなり多く沈着する。)  
6 暗青色粗砂(水灰土含む。)(現代水路堆土。)  
7 黄褐色土(含めかなり多く沈着する。)(現代水路堆土。)  
8 暗青色粘土(有機質を含む。)(現代水路堆土。)  
9 暗青色粘土(上層より褐色が強い。有機質を含む。現代水路堆土。)  
10 暗褐色シルト  
11 淡黄色シルト  
12 淡黄色青褐色泥じり粘土質土  
13 淡黄色青褐色泥じり粘土質土  
14 淡黄色粗砂(洪流水砂。)  
15 淡黄色粗砂(洪流水砂。)  
16 淡黄色粘土(含め後期水田耕土?)  
17 淡黄色粘土(含め後期水田耕土?)  
18 淡黄色沙質土(含め後期水田耕土。)  
19 淡黄色粘土(含め後期水田耕土。)  
20 暗褐色シルト(含め後期水田耕土。)
- 21 淡黄色沙質土(大礫理土。)  
22 淡黄色粘土質土(Mn鉱脈。)  
23 淡黄色沙質土(洪流水砂。)  
24 淡黄色沙質土(含め後期水田耕土。)  
25 淡黄色沙質土  
26 淡黄色沙質土(含め2層土。)  
27 淡黄色沙質土(含め3層土。)  
28 淡黄色沙質土(Mn鉱脈。含め4層土。)  
29 淡黄色沙質土(Mn鉱脈。含め5層土。)  
30 淡黄色沙質土(含め6層土。)  
31 淡黄色沙質土(Mn鉱脈。)  
32 淡黄色粗砂(含めMn鉱脈。)  
33 淡黄色粗砂(含めMn鉱脈。32層と同一。)  
34 淡黄色粗砂(含めMn鉱脈。)  
35 淡黄色粗砂(含めMn鉱脈。よりも薄い。36層の土がブロック状に連じる。)  
36 淡黄色粘土質土(含め後期水田耕土。)  
37 淡黄色沙質土(含め後期水田耕土。)  
38 淡黄色沙質土(含め後期水田耕土。)

図 6 ポンプ場配管部分南壁土層断面図 ( $S = 1 / 80$ )

他の畦畔と比べて若干頑丈である。またこの畦畔を境として、西側は東側よりも若干区画が大きくなっている。のことからこの畦畔は、水田区画の境界に位置する中畦ともいべき性格を持つ畦畔と考えられる。

配管部分中央を南北に走る大畦から東側は湿地状の地形であり、弥生後期末の洪水砂の下標高1.8

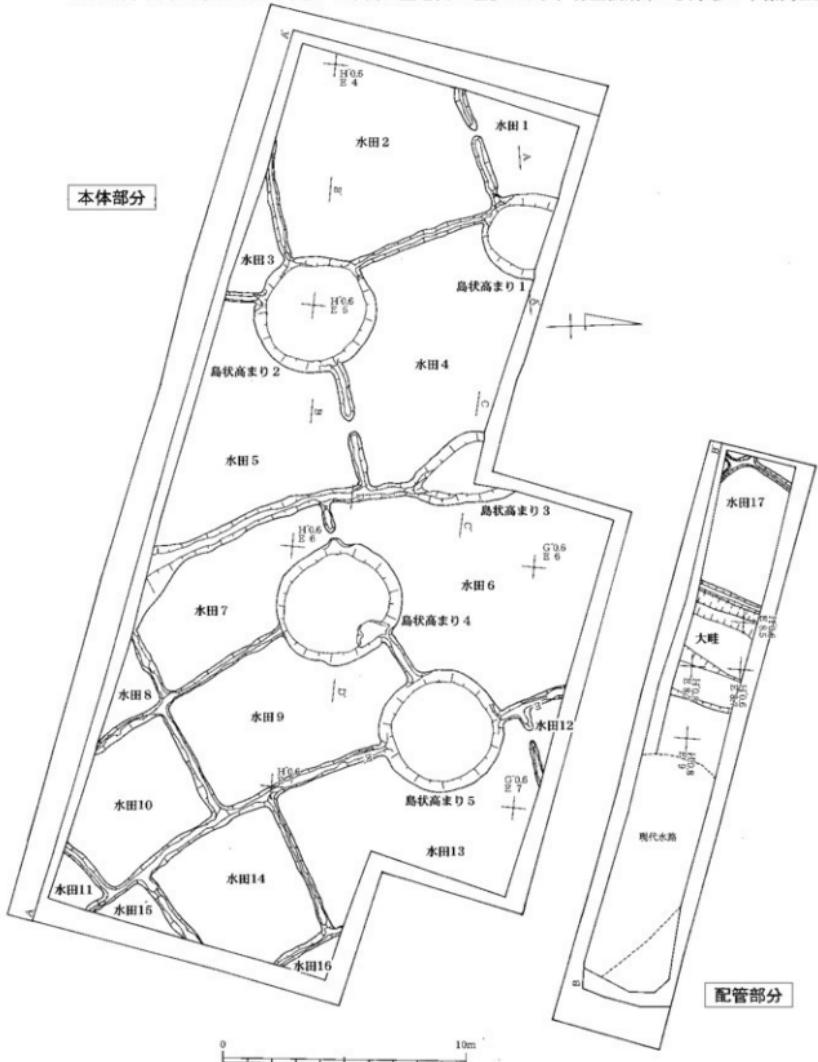


図7 本体・配管部分弥生時代後期水田面平面図 ( $S = 1/200$ )

m付近に暗青褐色土(図6第16・17層)が厚さ12~13cmで水平堆積しているのが認められる。この層が湿地上に営まれた水田層であった可能性も考えられるが、大部分が近代の溝により切られ、水路、畦畔等の遺構も確認できなかったため、具体的な様相は不明である。

#### 大畦

配管部分中央やや西よりに位置する。幅約4.30m、西側の水田耕土面からの高さ約20cmをはかる。断面形は、東がやや緩やかで、西が急な直角形状を呈する。水田開発に伴い削平されたと思われる微高地上に、40cm以上盛土を行い築造されている。また、西側の裾部では、水田耕土が盛土の上に重なっていることがみとめられ、水田耕作面形成以前に築造されたものと推測される。

この遺構は便宜上「大畦」と表記したが、周辺部の他の地点から検出されている、水田を大きく区画する幅1m前後の「大畦」とは異なっている。配管部分は、調査区の幅が5m程度と狭いために、全体の様相は不明であるが、後述する島状高まりの土層断面と類似していることから、築造方法も同様であると考えられる。当調査区の北約300m、百間川沢田跡遺跡高縄手調査区において、弥生時代後期水田面から、細長い回廊状の島状高まりが検出されている<sup>註1)</sup>。当調査区の大畦もこれに類するものであった可能性が考えられる。

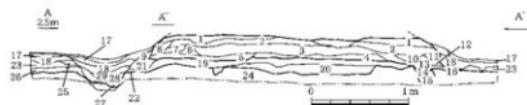
盛土内からは、土器細片が若干出土しているが、図示できる物はなかった。

島状高まり1

本体部分北西端に位置し、水田1・2・4に囲まれている。北側は調査区域外で、全体の形状は不明であるが、径約3.5mの円形を呈すると推測される。水田耕土面からの残存高は、約20cmである。土層観察から、弥生後期遺構面の基盤層と考えられる第19~25層(図9)は、盛土に覆われた部分が、周囲の水田耕土下の部分よりも僅かに高くなっていることが認められる。このことから水田形成に伴うと考えられる微高地削平時に、島状高まりの位置する部分を、僅かに削り残し、その上に数層の土を25cm以上盛り上げて築造したと考えられる。また、端部を覆うように水田耕土が認められることから、この島状高まりは、耕作面形成以前に築造されたものと推測される。頂部平坦面から遺構は確認されなかった。盛土中から、サヌカイト製の石鎌が1



図8 島状高まり1出土遺物



- |                      |                               |
|----------------------|-------------------------------|
| 1 黄灰色微砂 (Fe・Mn集積。)   | 16 暗灰茶色粘質微砂                   |
| 2 褐灰色粘質微砂 (Fe・Mn集積。) | 17 暗灰茶色シルト (洪水砂直下の水田耕土層。)     |
| 3 灰黄褐色粘質微砂 (Fe集積。)   | 18 青褐色シルト微砂 (水田耕土。)           |
| 4 明黄褐色シルト・微砂         | 19 灰素褐色粘質微砂                   |
| 5 灰褐色粘質微砂 (Fe集積。)    | 20 暗灰茶色粘質微砂 (Mn集積。)           |
| 6 褐茶色微砂 (Mn集積。)      | 21 黄褐色茶色微砂 (Mn集積。)            |
| 7 灰褐色微砂              | 22 青褐色粘質微砂                    |
| 8 褐灰茶色微砂 (Mn集積。)     | 23 明褐色茶色シルト微砂 (基盤層の影響を受けている。) |
| 9 淡褐色微砂 (Mn集積。)      | 24 暗褐色粘質微砂 (基盤層。)             |
| 10 淡灰黄色粘質微砂          | 25 明褐色微砂 (Fe集積。)              |
| 11 淡茶色粘質微砂 (Mn集積。)   | 26 暗褐色茶色粘質微砂                  |
| 12 淡褐色微砂 (Fe集積。)     | 3 灰土                          |
| 13 淡褐色シルト・微砂         | 27 青褐色シルト・粘土                  |
| 14 淡黄色粘質微砂           | 28 青褐色シルト                     |
| 15 淡灰黄色粘質微砂          | 29 暗褐色シルト・微砂                  |

図9 島状高まり1土層断面図 (S=1/50)

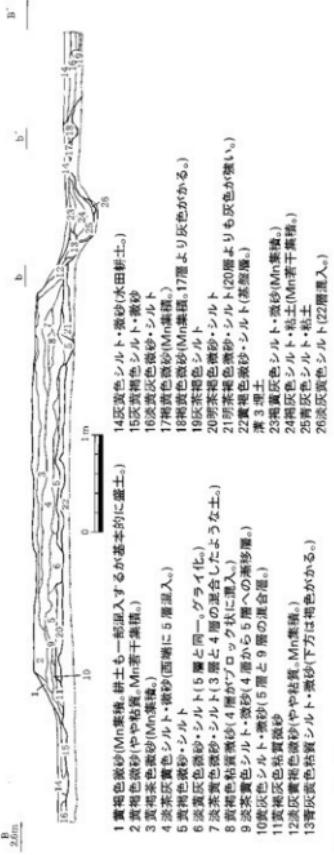


図10 島状高まり2土層断面図 ( $S = 1/50$ )

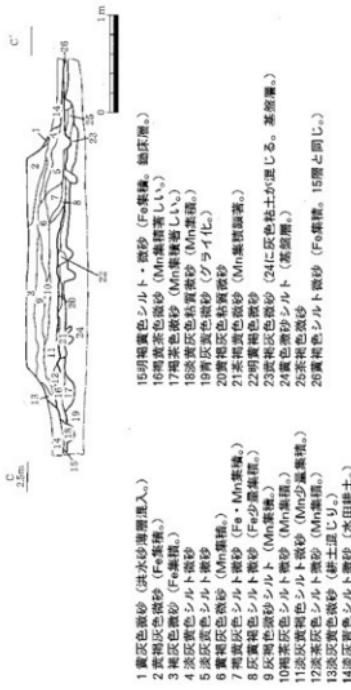


図11 島状高まり3土層断面図 ( $S = 1/50$ )

点出土している。(図8)

### 島状高まり 2

島状高まり1の南に、約5m離れて位置し、水田2・3・4・5に囲まれている。径約5mをはかる円形の島状高まりである。水田耕土面からの高さは約30cmをはかる。(図10) 島状高まり1と同様、基盤層(20~22層、図11)を僅かに削り残した上に、少なくとも35cm以上盛土を行い築造したものと考えられる。周囲の水田耕土は、盛土端部を覆うように認められることから、水田耕作面形成以前に築造されたことが推測される。盛土中からは、土器細片が僅かに出土したが、図示できるものはなかった。

### 島状高まり 3

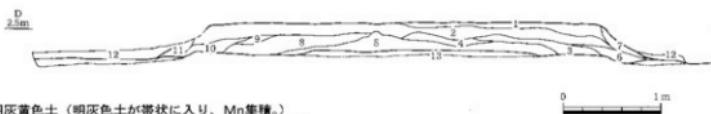
島状高まり1の東に約7m離れて、水田4・5・6に囲まれて位置している。北側は調査区外であり、全体の形状は不明である。東西方向の幅は約2.4m、水田耕土面からの高さは約30cmである。他の島状高まりと同様、盛土に覆われた部分の基盤層は、周囲より僅かに高くなっている。基盤層を削り残した上に土を盛り築造したものと考えられる。周囲の水田耕土は、盛り土端部の上に重なっており、耕作面形成以前に築造されたものと推測される。

上記のように、この島状高まりからは、水田区画の単位を示していると考えられるやや頑丈な畦畔が、南へ延びている。畦畔の南端は、幅約80cmをはかり南側に別の島状高まりが存在する可能性もある。のことから、当島状高まりは小畦畔のみが取り付く他の島状高まりとは異なると推測される。

盛土内部からは土器細片が僅かに出土しているが、図示できる物はなかった。

#### 島状高まり 4

島状高まり3の南東約4mのところに、水田6・7・9に囲まれて位置している。径約4mの円形を呈し、一部上からの擾乱により壊されている。水田耕土面からの高さは約30cmである。他の島状高まりと同様、基盤層（第13層、図12）を僅かに削り残した上に盛土を行い、築造したものと考えられ



- 1 明灰黄色土（明灰色土が帶状に入り、Mn集積。）
- 2 明褐色土（明灰色土が帶状に入り、Mn若干集積。）
- 3 淡褐色土（暗褐色土・青灰色土が混入。やや粘質。）
- 4 暗黃褐色土（暗褐色土が帶状に若干入る。）
- 5 暗黃褐色土（明褐色土が帶状に若干入り下の方は灰色が濃くなる。）
- 6 明黃色土（暗褐色土が段状に入る。）
- 7 淡褐色土（Mn集積。灰白色土を帶状に含む。）
- 8 暗褐色土（5層よりも灰色が強くMn集積。）
- 9 淡褐色土（Fe・Mnわずかに集積。）
- 10 暗灰黄色土（8層よりも明るい。Mn若干集積。）
- 11 灰色土（一部に耕土土（混入。））
- 12 暗灰褐色粘質土（暗灰色粘土を帶状に含み、Fe・Mn集積。）
- 13 明褐色砂混じり粘質土（灰色粘土を帶状に含み、Mn集積。）

図12 島状高まり4土層断面図（S = 1/50）

る。水田耕土は盛土端部の上に重なっており、水田耕作面形成以前に築造されたものと推測される。頂部平坦面上から遺構は確認されていない。盛土中からは土器細片が僅かに出土しているが、図示できる物はなかった。

#### 島状高まり 5

島状高まり4の東約2mのところに、水田6・9・12・13に囲まれて位置する。径約5mの円形を呈し、水田耕土面からの高さは約30cmである。他の島状高まりと同様、基盤層（第11・12層、図14）を僅かに削り残した上に40cm以上盛土を行い築造されている。水田耕土は、盛土端部の上に重なっており、水田耕作面形成以前に築造されたと考えられる。頂部平坦面上に遺構は確認されていない。

盛土中からは図13のサヌカイト製石錠が1点出土した。

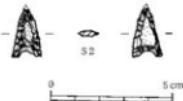
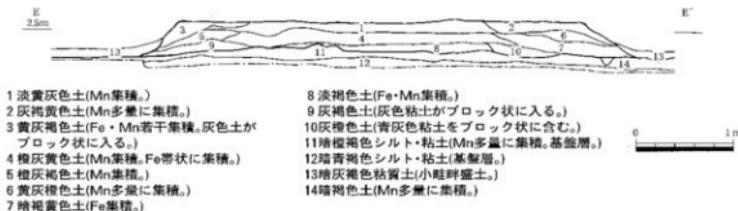


図13 島状高まり5出土遺物（S = 1/2）



- 1 淡黃褐色土(Mn集積。)
- 2 暗褐色土(Mn多量に集積。)
- 3 黄褐色土(Fe・Mn若干集積。灰色土がブロック状に入る。)
- 4 暗褐黃褐色土(Mn集積。Fe帶状に集積。)
- 5 暗褐褐色土(Mn集積。)
- 6 黄灰褐色土(Mn多量に集積。)
- 7 暗褐黃色土(Fe集積。)
- 8 淡褐色土(Fe・Mn集積。)
- 9 灰褐色土(灰色粘土がブロック状に入る。)
- 10 暗褐色土(青灰色粘土をブロック状に含む。)
- 11 暗褐色シルト・粘土(Mn多量に集積。基盤層。)
- 12 暗青褐色シルト・粘土(基盤層。)
- 13 暗青褐色粘質土(小粒群疊土。)
- 14 暗褐色土(Mn多量に集積。)

図14 島状高まり5土層断面図（S = 1/50）



#### 弥生時代後期～前期

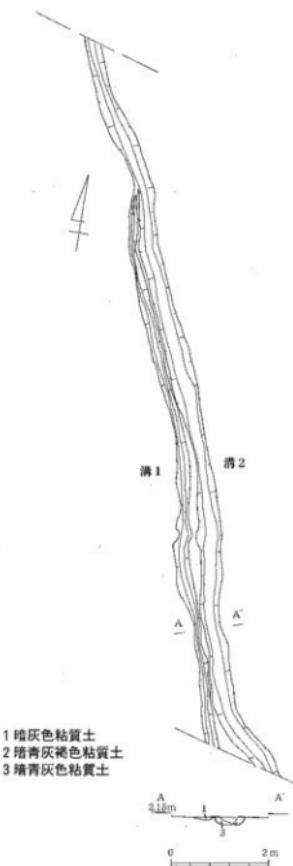
弥生水田耕土直下に形成された遺構面である。水田耕土および島状高まりの盛土を除去すると橙～黄色の砂質土が広がっており、その上に検出された遺構群である。標高は約2.1m前後をはかる。数本の溝状遺構、多数のピットが検出されたが、弥生後期水田開発により、上面をかなり削平されたと考えられ、一部の遺構を除いて非常に浅い。ピット群は平面形が不整形なものが多く、人為的に掘削されたものは少ないと考えられる。遺物を伴う遺構も少なく遺物量もわずかであるため、弥生時代後期～前期の範疇でしかたらえられない遺構が多い。以下では遺物を伴う遺構を中心として、各遺構の説明を行っていく。

#### 溝1

本体部分西側に位置する溝状遺構である。幅25～30cm、溝2から枝分かれし、平行してやや東よりに南流すると考えられる。長さは11m以上、深さは約3cm、断面は皿状を呈し埋土は1層である。底部の標高は、約2.10m前後である。(図16)。

溝2との関連は、埋土が溝2の方がグライ化しているものの、基本的に同質であり、明確な切り合い関係も認められないため、同時期に存在していた可能性が高い。本遺構は、非常に浅く、断面が皿状を呈するなど人為的に掘削されたものとは考えにくいため、溝2からあふれた水が流れ

図16 溝1・2平・断面図 (S=1/100)



た痕跡と考えられる。

埋土中からは土器細片が僅かに出土しているが、図示できるものはなかった。

## 溝2

本体部分西側、溝1に隣接する溝状遺構である。幅30~40cm、長さ16m以上、深さ約10cm、断面は

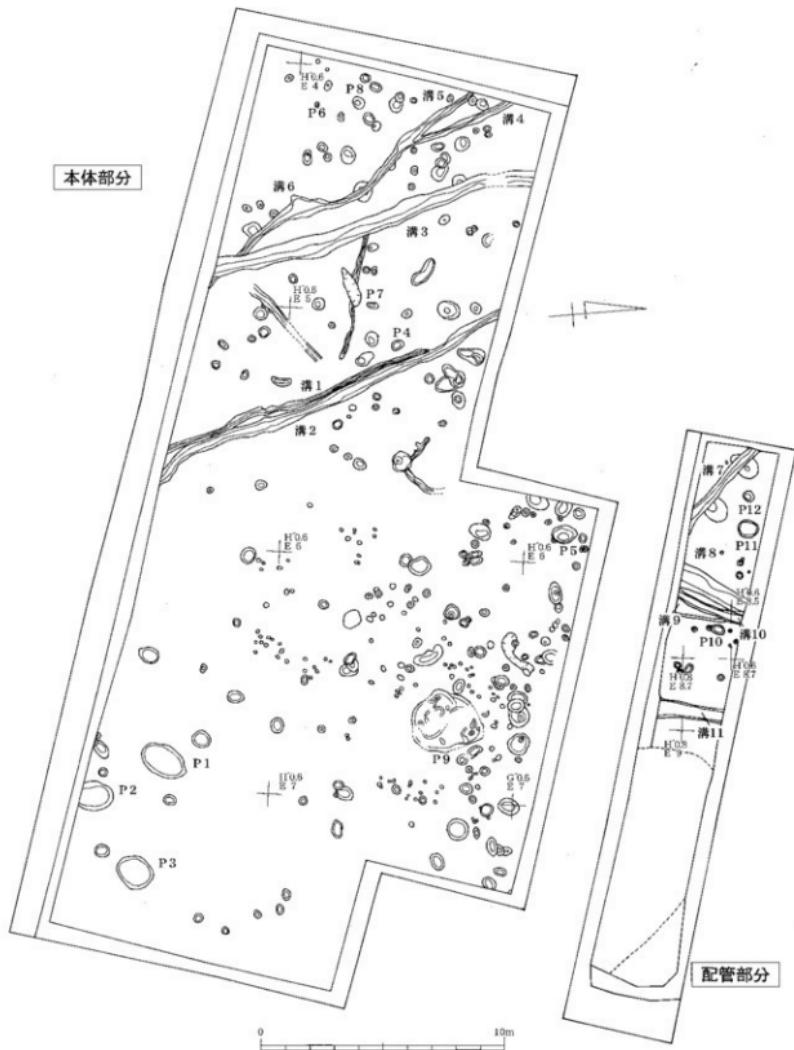


図17 本体・配管部分弥生時代後期～前期面平面図 (S = 1 / 200)

浅い逆台形状を呈し埋土は2層である。底部の標高は約2.05m前後で、やや東よりに南流すると考えられる。(図16)

本遺構のびる方向は、弥生後期水田層の南北にびる畦畔の方向と一致しており、弥生後期水田開発に関連する遺構と考えられる。

埋土中からは、遺物は出土しなかった。

### 溝3

溝2の西約6mのところに位置する溝状遺構である。幅約60~70cm、深さ約30~40cm、断面形は比較的鋭角に落ちる逆台形状を呈する。埋土は2~4層確認され、レンズ状に堆積している。底部の標高は1.80~1.85m付近である。溝2に平行してやや東よりに南流するものと考えられる。長さは16m以上確認した。(図18)

本遺構の埋土の上には、上層の水田耕土が落ち込んでおり、これにより弥生後期水田面においても細長いくぼみとして確認できる。また、本遺構は、上層の島状高まり1の西側据部、水田2の東側畦畔、および島状高まり2の西側据部に隣接して掘削されており、このことからこれらの島状高まりや畦畔は、耕土直下に位置する溝3を基準として造られたことが考えられ、従って平行して流れる溝2と同様、本遺構は弥生後期水田の開発に伴い掘削されたものであると推測される。(断面は図9・10)

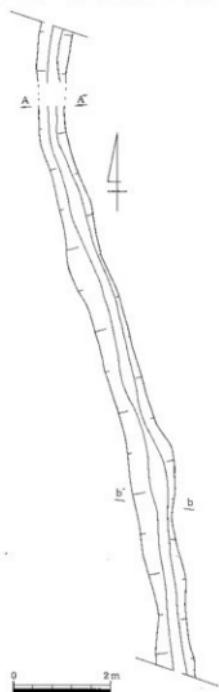


図18 溝3平面図 ( $S = 1/100$ )

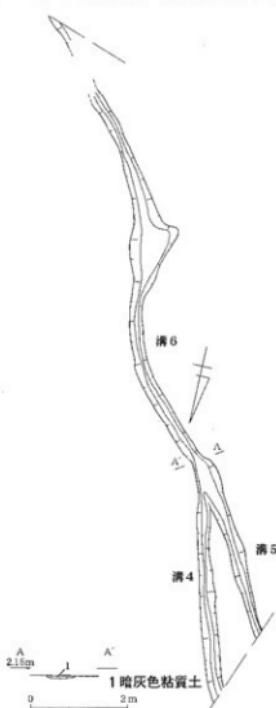


図19 溝4・5・6平・断面図 ( $S = 1/100$ )

参照)

埋土中からは、土器細片が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

#### 溝4・5・6

本体部分西端に位置する溝状遺構である。幅は広いところで約60cm、狭いところで約15cmとばらつきがある。深さは4cm～6cm、断面は皿状を呈する。底部の標高は2.05m～2.00mをはかり、南流するものと考えられる。埋土は1層である。調査区の北西隅のあたりから、2本の溝（溝4・溝5）が南へ延び、5mほどのところで合流する（溝6）。便宜上3つの遺構に分けたが、埋土は同じであり同時期に存在したものと考えられる。溝3に切られていることから、それに先行するものと考えられる。3本の溝をあわせて、14m以上検出された。（図19）

本遺構はかなり蛇行しており、また非常に浅く、自然流路であった可能性も考えられる。

遺物は、溝4および6から土器細片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

#### 溝7

配管部分西端に位置する溝状遺構である。幅約40cm深さ約10cm、断面形は深皿状を呈し、底部の標高は約2.00mをはかる。長さは4m以上確認したが、調査区の幅が狭いため、全体の形状は不明である。埋土は1層であり、南東方向へ流れると考えられる。（図20）

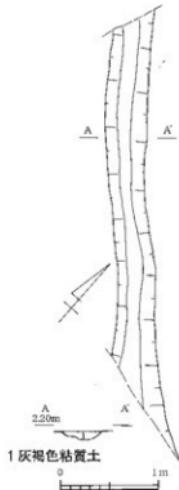


図20 溝7平・断面図 ( $S = 1/50$ )

埋土中からは土器細片が僅かに出土しているが、図示できる物はないため、詳しい時期は不明である。

#### 溝8

配管部分西半部に位置し、後述する溝10に接している溝状遺構である。幅0.8m～1m、深さ約15cm、断面は皿状を呈する。底部の標高は2.00m付近である。長さ3m以上確認されたが、調査区の幅がせまいため、全体の形状は不明である。埋土は2層であり、南西へ流れると考えられる。（図21）

本遺構は、後述する溝9・10と同様上層の弥生後期の大甕の西側端部に位置し、ほぼ平行にのびていることから、前述した溝2・3と同様、弥生後期水田開発に関連する遺構と考えられる。このことから本遺構の時期は弥生後期の範疇にあると考えられる。

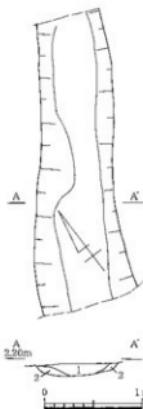


図21 溝8平・断面図 ( $S = 1/50$ )

配管部分西側、後述する溝10に切られる形で検出された、

南北にのびる溝状遺構である。幅70cm以上、深さ約8cmをはかる。底部の標高は2.05m付近である。長さは約2m検出された。埋土は1層であり、南流すると考えられる。(図22)

本遺構は、溝10の掘り方の一部の可能性もあるが、方向が異なっているところから、別遺構と判断した。しかし上層の弥生後期末の大畦西端に平行して掘削されているところから、溝2・3と同様、弥生後期における水田開発に関連する遺構と考えられる。このことから本遺構の時期は弥生後期の範疇にあると考えられる。

埋土中からは土器細片が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

溝10

配管部分西側溝7を切る形で検出された溝状遺構である。溝6に切られているところから、それに先行すると考えられる。幅30~35cm深さ約8cmをはかり、北北東から南南西にのびる。断面形は皿状を呈し、底部の標高は約1.95mをはかる。3m以上が検出され、埋土は2層確認された。調査区の幅がせまいため、全体の形状は不明であるが、南南西に流れると推測される。(図22)

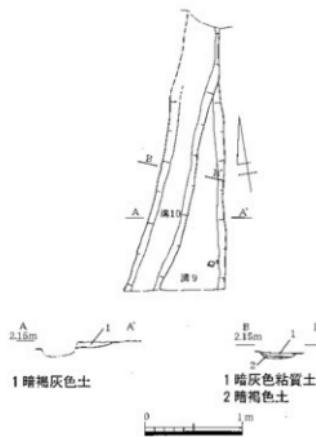


図22 溝9・10平・断面図 ( $S = 1/50$ )

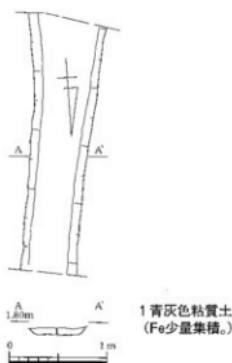


図23 溝11平・断面図 ( $S = 1/50$ )

長さは約2.5m検出された。埋土は1層確認され、南流すると考えられる。(図23)

本遺構は調査区の幅が狭いため、全体の形状は不明だが、上層の弥生後期水田面の大畦東側端部に位置しており、また溝9とほぼ平行しているところから、弥

生後期の範疇にあるものと考えられる。

溝11

配管部分中央付近、微高地端部で検出された南北にのびる溝状遺構である。幅約60~80cm、深さ約10cm、断面形は底が平らな皿状を呈する。底部の標高は1.65m付近、

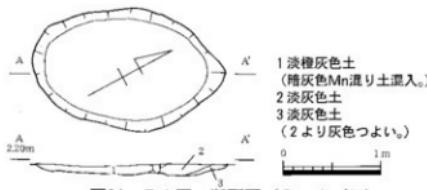


図24 P 1平・断面図 ( $S = 1/50$ )

生後期水田の開発に関連する遺構と考えられる。遺物は埋土中から、土器細片が僅かに出土しているが、図示できるものはなかった。

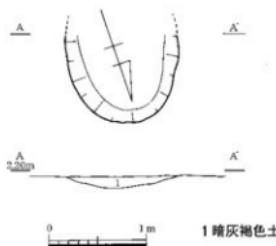


図25 P 2 平・断面図 ( $S = 1/50$ )

P 2

本体部分南東、P 1 の東側に位置する。平面形は南北に軸を持つ楕円形を呈すると考えられるが、南側が調査区外であるため、全体の形状は不明である。長径0.9m以上、短径1.1mをはかる。深さは約12cm、底部の標高は2.2m付近である。断面形は皿状を呈し、埋土は1層である。(図25)

埋土中から遺物は出土しなかったため、時期判断は困難であり、詳しい時期は不明である。

本遺構の時期は、弥生後期の水田の開発に関連すると推測されるところから、弥生後期の範疇にあると考えられる。P 1

本体部分南西に位置するピットである。長径1.98m、短径1.28mでやや北寄りに長軸を持ち、楕円形を呈する。深さは約8cm～15cmで、北側が若干深い。底部の標高は2.05～2.10mで、断面形は皿状を呈する。埋土は3層で、北側から埋没していったことが観察される。(図24)

埋土中からは遺物は出土しなかったため、詳しい時期は不明である。

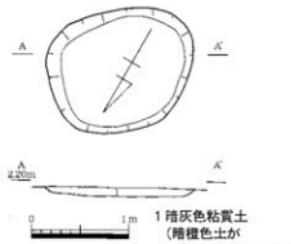


図26 P 3 平・断面図 ( $S = 1/50$ )

P 3

本体部分の南東、P 1 の東に位置する。平面形は歪な楕円形を呈する。長径は約1.5m、短径は約1.3m、深さは約10cmをはかる。底部の標高は約2.03m、断面形は皿状を呈し、埋土は1層である。(図26)

埋土中からは遺物は出土しなかったため、時期判断は困難であり、詳しい時期は不明である。

P 1・2・3は近接して位置し、規模も近似しており、

図27 P 4 平・断面図 ( $S = 1/40$ ) いずれも灰白色系の同質の土で埋没しているところから同時期に存在していた可能性が高い。墓壙の可能性もあるが削平が著しく、遺構の性格は不明である。

P 4

本体部分西、溝1・2の西に位置する。長径0.5m、短径0.35mで南北に軸を持つ楕円形を呈する。深さは約40cm、底部の標高は約1.6mである。断面形は西へ緩やかに下り、東へ急に立ち上がる歪な楕形を呈する。埋土は2層確認された。(図27)

埋土中からは、土器細片が僅かに出土しているが図示できるものはないため、時期判断は困難であり、詳しい時期は不明である。

P 5

本体部分北端に位置する。長径約1m、短径約0.7m、南北に軸を持つ楕円形を呈する。深さは約

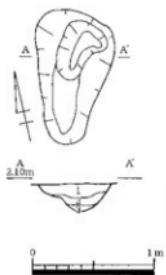


図28 P 5 平・断面図 (S = 1/40)

- 1 暗褐色灰土  
(焼土・木炭粒含む) P 6
- 2 暗褐色土  
(焼土・木炭粒含む)
- 3 暗灰色土

20cm、底部の標高は約1.85mである。断面形は、東が急に下り、西へ緩やかに上がる垂な深皿形を呈する。埋土は3層で、ほぼ水平に埋まっている。(図28)

埋土中からは土器細片が僅かに出土しているが、図示できるものはない。時期判断は困難であり詳しい時期は不明である。

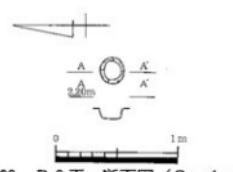


図29 P 6 平・断面図 (S = 1/40)



図30 P 6 出土遺物

本体部分南西端部に位置する直徑約0.2mの円形のピットである。深さ約10cm、底部の標高は約2.0m、断面形は逆台形状を呈する。(図29)

埋土内からサヌカイトの剝片が1点出土している(図30)が、時期判断は困難であり、詳しい時期は不明である。

P 7

本体部分西侧、溝3の西侧に位置している。多くの窪みが集まってできた東西に長いアーマーバー状の凹みであり、長軸約1.6m、短軸約0.5m、深さは深いところで約10cmをはかる。(図31)

埋土中からは、図32の土器片が出土している。この遺物は弥生後期の範疇にあると考えられるが、本遺構は不定形で明確な掘り方を持たないところから、風倒木痕のようなものである可能性が高い。

P 8

本体部分西南端に位置する。直徑約0.5mの垂な円形を呈するピットである。深さ約10cm、底部の標高は約1.95mをはかる。断面形は皿状を呈し、埋土は2層で、東側から埋没したことが観察される。(図33)

埋土中からは、土器細片がわずかに出土しているが、図示できるものはない。時期判断は困難で、詳しい時期は不明である。

P 9

本体部分北東に位置する。東西約2.5m、南北約3.5mをはかる、不整形なピットである。底部は多くの凹凸がみとめられ、当初は複数のピットが切り合った可能性を考えたが、断面観察等により、一つの遺構と判断した。深さは深い部分では約30cmをはかるが、おおむね10cm~15cmの範囲に収まる。底部の標高は、深い部分で約1.85mである。埋土の堆積状況は、何層もの土が、複雑に堆積しており、焼土粒を含む土層が多くみられる。(図34)

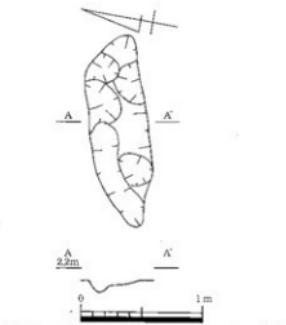


図31 P 7 平・断面図 (S = 1/40)

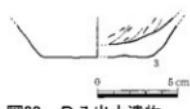


図32 P 7 出土遺物

- 灰黃褐色土(燒土粒若干含む。Mn沈着。)
  - 暗褐色土(燒土粒比較的多く含む。Mn沈着。)
  - 暗灰褐色土(燒土粒若干含む。)
  - 黃褐色土(木炭、燒土粒若干含む。Mn沈着。)
  - 灰褐色土(やや黃色を帯びる。Mn沈着。)
  - 暗褐色土
  - 褐土(上方に木炭粒含む。下方グリ化。)
  - 赤褐灰色土(Mn沈着。)
  - 暗褐灰色土(燒土粒僅かに含む。)
  - 暗灰褐色土(木炭・燒土粒を僅かに含む。Mn沈着。)
  - 暗黃褐色土(木炭・燒土粒を僅かに含む。Mn沈着。)
- 基盤の土がブロック状に入る。)

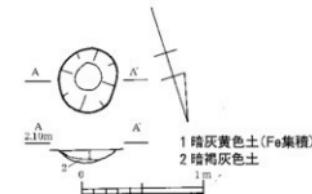
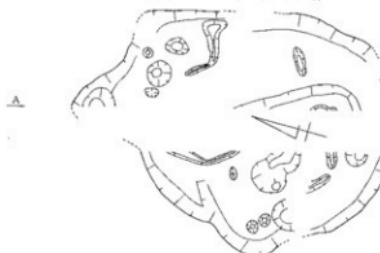


図33 P 8 平・断面図 (S = 1 / 40)

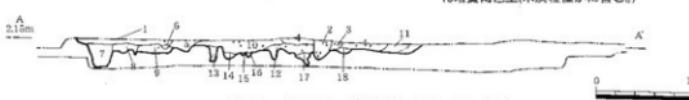


図34 P 9 平・断面図 (S = 1 / 50)

この遺構は、島状高まり 5 の盛土の下、削り残した基盤上に検出された。島状高まり 5 の範囲のほぼ中央に位置しており、島状高まり 5 の構造に関する遺構と考えられるが、具体的な性格は不明である。遺物は、埋土中から土器細片が僅かに出土しているが、図示できるものはなかった。上記の理由から時期は弥生後期の範疇にあると考えられる。

しかし、本遺構の、不整形な平面形を呈し、底部の凹凸は激しく、また埋土中に多くの焼土粒を含んでいるといった特徴は、北に位置する百間川沢田遺跡高縄手調査区において検出されている縄文晩期の土壌<sup>(21)</sup>と共に通るものがあり、該期の遺構である可能性も否定できない。<sup>(22)</sup>

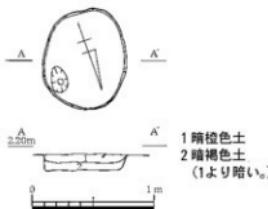


図37 P 11 平・断面図 (S = 1 / 40)



図38 P 11出土遺物

#### P 10

管部分大畦の盛土の下の基盤層上に検出されたピットである。南北約0.55m、東西約0.4mの楕円形を呈する。深さは約20cmを測り、断面形は急傾斜の台形状を呈する。底部の標高は約1.8m付近である。埋土は2層認められ、一度に埋没



図39 P12平・断面図 ( $S = 1/40$ )

した後上方に残った凹みに他の土が堆積した状況が観察された。(図35)

埋土中からは、図36の土器が出土した。この土器から、本遺構は弥生中期の範疇にあると考えられる。

P11

配管部分西側に位置する、東西約0.7m南北約0.8mの楕円形のピットである。深さは約15cmをはかり、断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形を呈する。底部の標高は約2.0mをはかる。埋土は2層認められ、ほぼ水平に堆積している。(図37)

2層の埋土のうち上層から、壺の口縁と思われる土器片が出土している。(図38) 遺物の時期から、本遺構は弥生前期の範疇にあると考えられる。

P12

配管部分西側、P11の西側に位置する、直径約40cmの円形のピットである。深さは約10cmをはかり、断面形は深皿形を呈する。底部の標高は約2.0m付近である。埋土は1層認められた。(図39)

埋土中からは、土器細片が僅かに出土したが、図示できるものはない。時期判断は困難であり、詳しい時期は不明である。

その他の遺物

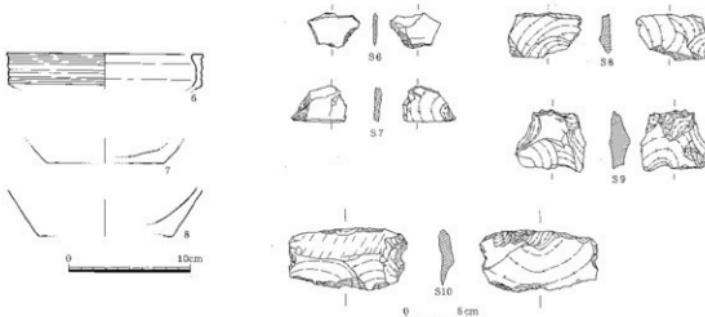


図40 遺構に伴わない遺物

上記の遺構面上には遺構に伴わない遺物が少量出土している。主に上層の弥生後期の水田耕土を除去した段階で出土した遺物であり、水田耕土の基盤層上に点々と散らばる形で出土した。

図40のS 6～9は、本体部分の弥生後期水田の耕土直下より出土した石器で、いずれもサヌカイト製の剥片である。S 10は配管部分の大鞋の盛土の下から出土した、サヌカイト製の打製石包丁である。6～8は配管部分の大鞋の盛土の下から出土した土器である。6は弥生時代中期の高杯、7・8は壺か甌の底部である。破片のため時期の判断は困難であるが、胎土から弥生時代前期の可能性がある。

### 弥生時代前期以前

標高1.95m付近に広がる遺構面である。前述した弥生後期～前期遺構面の数cmから十数cm下、本体部分土層断面図では、55～58層に相当する面に営まれている。弥生後期～前期の遺構面と標高がほと

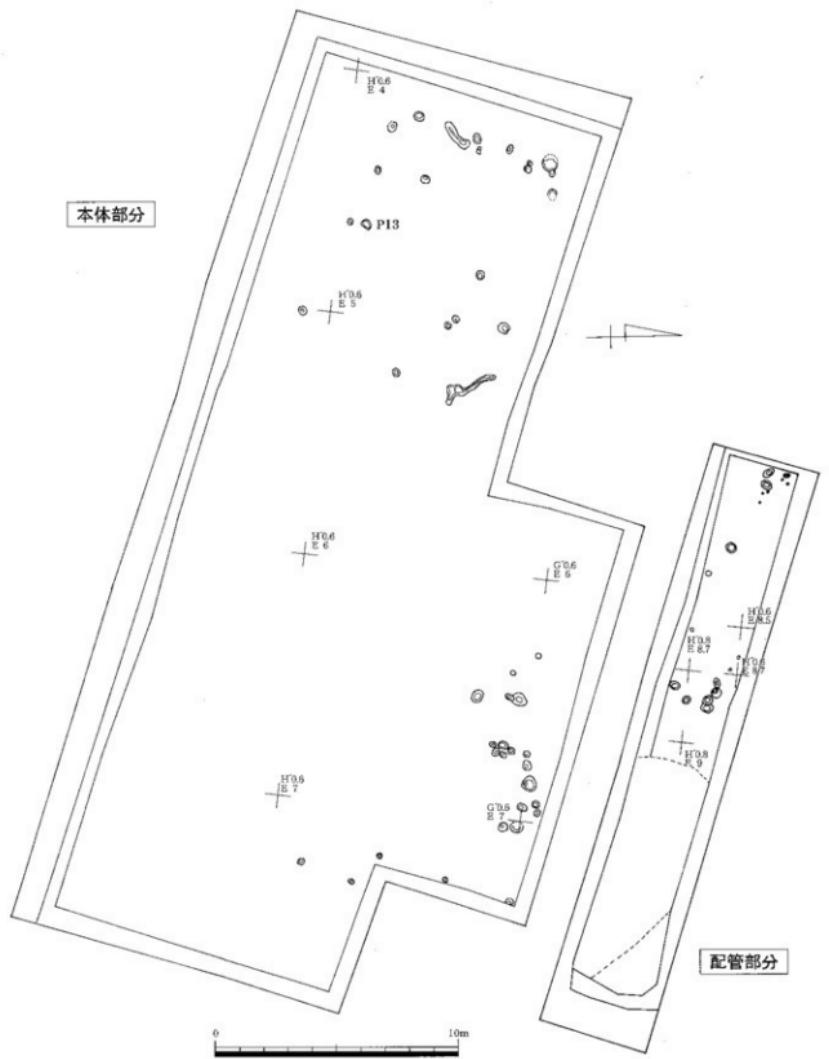


図41 本体・配管部分弥生時代前期以前面平面図 ( $S = 1/200$ )

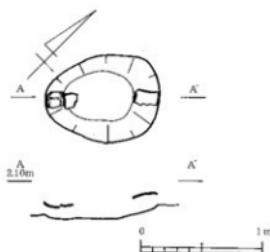


図42 P13平・断面図 (S = 1/40)

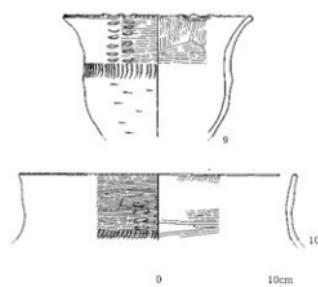


図43 P13出土遺物

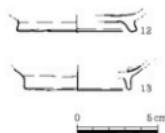


図45 その他の遺物

んど変わらない箇所もあるため、元来同一面に営まれていた可能性もある。

造構密度は非常に疎らであり、出土遺物も僅かである。遺構は深さ10cm以下のものが大多数で、遺物を伴うものは、後述するP13のみである。掘り方が不整形なものが多く、人為的に掘削された遺構は少ないものと考えられる。この遺構面上には縄文晚期の土器片が少量認められたため、縄文時代の造構面と判断した。

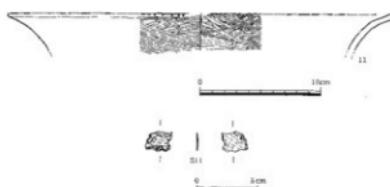


図44 遺構に伴わない遺物

### P13

本体部分西側に位置する、東西0.7m、南北0.9mの楕円形のピットである。深さは約5cmをはかり、断面形状は皿状を呈する。底部の標高は約1.80mである。(図42)

図43の土器が、底部より約10cm、標高約1.90m付近から浮いた状態で出土している。本造構の掘り方は、土器の周辺をかなり掘り下げた状態で検出しており、本来はもう少し深かった可能性が高い。出土遺物から当造構の時期は、縄文晚期と考えられる。

### 遺構に伴わない遺物

上記のように、当造構面上からは、数点の土器細片が散在して出土している。図示できたものは1点(図44)であり、縄文時代晚期の土器である。S11はサヌカイトの剥片である。

### その他の遺物

ポンプ場本体部分の弥生後期末の洪水砂上には、いくつかの凹みが観察されている。いずれも浅く、人為的な物かどうか判断はできなかったため本書には掲載していない。

凹みの中には土器細片が若干認められた。以下図示できた物を掲載しておく。図45の12・13は、いずれも楕の高台部分である。13は内部黒色土器である。いずれの土器も、高台部分のみが僅かに残存している状態で、全体の形状は不詳であるが、古代末から中世の範疇に属する物と推測される。

土器片はいずれも摩耗しており、これらの凹みに伴う物ではなく、余所からの流れ込みであると推測される。

## 第2項 道路部分(百間川原尾島遺跡部分)調査区

本体部分の西に掘削が予定されていた、下水道管渠立坑用地上の調査である。本体部分の南から西へ延びる水田畦上に、総延長250mにわたって、道路新設工事が行われており、その上に約110m間隔

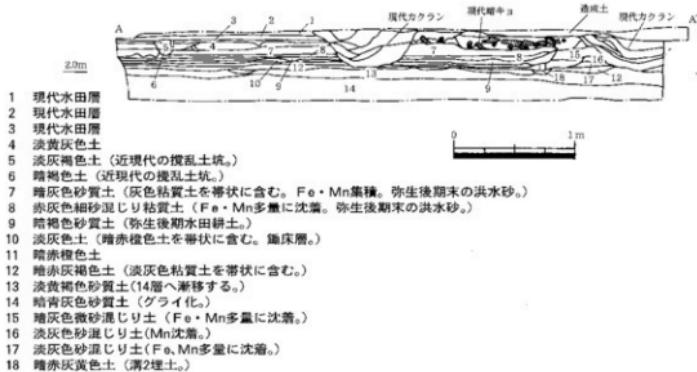


図46 道路部分東調査区南壁土層断面図 ( $S = 1/80$ )

で調査区を設定した。東側から道路部分東調査区、道路部分中調査区、道路部分西調査区とする。その内、道路部分東・中調査区からはポンプ場本体部分および配管部分と同様に微高地上に営まれた遺構が検出され、道路部分西調査区からは河道が検出された。

以下各調査区分に遺物が出土した遺構を中心に説明する。なお西調査区は土層断面図のみを掲載する。

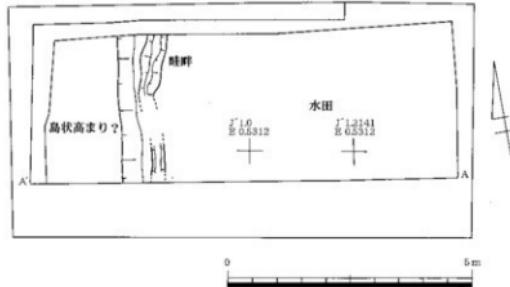


図47 道路部分東調査区弥生時代後期遺構面 ( $S = 1/100$ )

### ○道路部分東調査区

ポンプ場本体部分から南西へ約15mに位置している。調査面積は45m<sup>2</sup>である。

#### 弥生時代後期

調査区の大部分に弥生後期末の洪水砂が約30cmの厚さで堆積している。(第7・8層、図46) その洪水砂を除去すると弥生後期水田面が検出された。調査区西側には11・15~17層よりなる高まりがみとめられ、洪水砂層および水田耕土層はこれに取り付く形でとぎれている。この高まりは島状高まりの可能性もあるが、調査部分が狭いため、全体の様相、性格は不明である。畦畔はほぼ東西に走る1条が確認されている。

水田面の標高は、標高約2.20mをはかり、本体・配管部分のそれと近似値を示すことから、本体・配管部分の弥生後期水田面と連続していると考えられる。水田耕土内からは土器細片が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

#### 弥生時代後期～前期

上記の弥生後期水田耕土除去

後に検出された、水田基盤層 図48 道路部分東調査区弥生時代後期～前期遺構面 ( $S = 1/100$ )  
 (11・12層) 上に広がる遺構面である。遺構の密度は疎らであり、ポンプ場本体部分、配管部分と同様上層の水田開発に伴って削平されたと考えられ、いずれも浅いものである。遺物はほとんど出土せず明確な時期は不明であるが、ポンプ場本体・配管部分の弥生時代後期～前期の遺構面と対応すると考えられ同時期のものと判断した。

#### 溝1

調査区の西側に位置する溝状遺構である。長さ3m以上、幅約0.4m、深さ約10cmをはかる。底部の標高は約2.0mであり、断面は皿状を呈する。中央が近代の溝により切られている。(図49)

上層の弥生後期水田面において検出された高まりの端部に位置しており、この高まりの築造に関連する遺構の可能性を考えられる。埋土中からは遺物は出土していないが、この理由から当遺構の時期は弥生時代後期の範疇にあると考えられる。

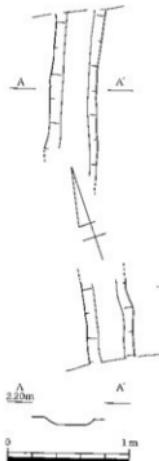
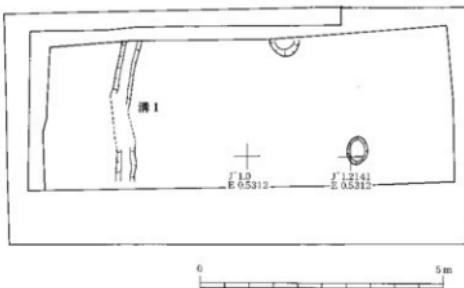


図49 溝1平・断面図 ( $S = 1/40$ )

#### 弥生時代前期以前

弥生後期～前期面をさらに数cmから10数cm下げたところで検出された標高1.90m付近に広がる遺構面である。ポンプ場本体・配管部分の弥生時代前期以前の遺構面と対応すると考えられるところから、該期の遺構面と判断した。遺構はポンプ場本体・配管部分と同様、密度は疎らで浅く、平面形が不整形な遺構が多い様相を呈している。

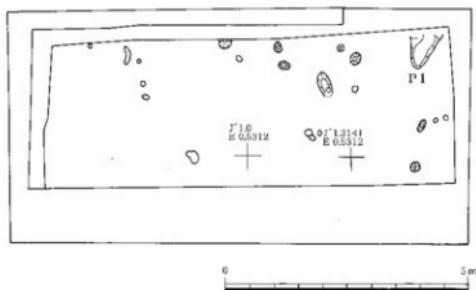


図50 道路部分東調査区弥生時代前期以前遺構面 ( $S = 1/100$ )

P 1

調査区北東端部に位置する、楕円形のピットである。東西0.5m、南北は北側が調査区外であるが0.7m以上あると考えられる。

深さは約20cm、底部の標高は0.7m付近である。埋土は2層認められ、水平に堆積していることから人為的に埋め戻された可能性もある。(図51)

埋土中からはサヌカイトのチップが1点出土した(図52)。上記の理由から弥生時代前期以前の遺構と考えられる。

図52 P 1出土遺物

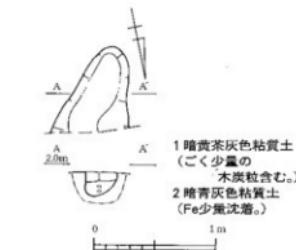


図51 P 1 平・断面図 ( $S = 1/40$ )

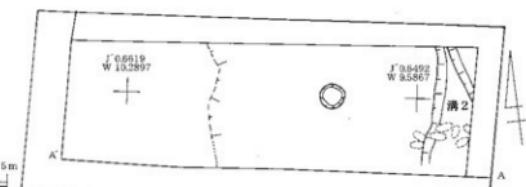
#### 1 造出土

- 2 暗灰褐色砂質土(現代溝埋土。)
- 3 淡黄色細砂(現代溝埋土。)
- 4 暗黄灰色砂混じり土(現代溝埋土。)
- 5 淡黄色細砂(現代溝埋土。)
- 6 灰褐色土(現代溝埋土。)
- 7 青灰色粘質土。
- 8 暗灰褐色土(やや粘質。)
- 9 暗灰青褐色粘質土(暗灰褐色粗砂が帯状に入る。)
- 10 暗灰褐色細砂(弥生後期末の洪水砂。)
- 11 暗灰褐色細砂( $Fe + Mn$ 沈着。)  
弥生後期末の洪水砂。)
- 12 淡灰色シルト(弥生後期末の洪水砂。)
- 13 淡褐色細砂( $Mn$ 多量に沈着。  
弥生後期末の洪水砂。)
- 14 暗灰褐色細砂( $Fe + Mn$ 沈着。  
弥生後期末の洪水砂。)
- 15 暗褐灰色粘質土(灰白色粘土が帯状に入り。  
 $Mn$ 沈着。水田耕土。)
- 16 暗褐灰色砂混じり粘質土(水田耕土。)
- 17 暗灰褐色土(灰白色粘土が帯状に入る。  
 $Mn$ 沈着。塗床層。)
- 18 暗褐色土。
- 19 暗灰褐色土。
- 20 哈暗橙色土
- 21 褐黄色土
- 22 床黄色土(燒土粒を含む。)
- 23 灰褐色土(灰色粘土が帶状に入る。 $Mn$ 沈着。)
- 24 灰褐色土(燒土粒を含む。)
- 25 明黃色土(燒土粒若干含む。)
- 26 暗灰黃褐色土(灰色粘土が帯状に入る。)
- 27 灰褐色土(灰色粘土が帶状に入る。 $Mn$ 沈着。)
- 28 暗褐色土(灰色粘土が帯状に入る。 $Mn$ 沈着。)
- 29 黄灰色土
- 30 暗黃灰色土(燒土粒若干含む。 $Mn$ 沈着。)
- 31 黑褐灰色粘質土(P1埋土。 $Mn$ 沈着。)
- 32 暗褐色土( $Mn$ 沈着。)
- 33 暗黃褐色土(溝埋土。)
- 34 暗褐色土(溝埋土。)
- 35 暗灰褐色土( $Mn$ 沈着。)
- 36 黄褐色土( $Mn$ 沈着。)
- 37 流灰褐色土( $Mn$ 沈着。)
- 38 黄灰色砂質土
- 39 青灰黃色砂質土(グライ化。)
- 40 黄灰色土( $Mn$ 沈着。)
- 41 暗灰褐色粘質土(グライ化。)

図53 道路部分中調査区南壁土層断面図 ( $S = 1/80$ )

図54

道路部分中調査区  
古墳時代以降遺構面  
( $S = 1/100$ )



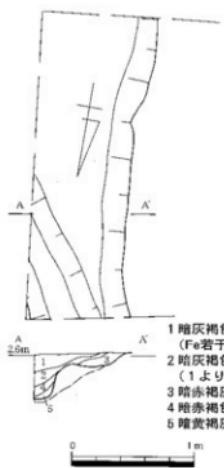


図55 溝2平・断面図 ( $S = 1/40$ )  
調査区東端で検出された溝状遺構である。長さは2.5m  
以上確認された。幅は1.3m以上あると考えられるが、東  
側が調査区外であるため不明である。2段の掘り方を持ち、  
1段目はほぼ南北にのび、2段目は北西から南東へのびる。  
深さは約40cmをはかり、底部の標高は2.2m付近である。

埋土中からは遺物は出土していない。また検出面直上まで現代の擾乱を受けており、本遺構の詳しい時期は不明である。洪水砂を切り込んでいたところから、古墳時代以降と推測される。

#### 弥生時代後期

##### 水田

約40cm堆積している洪水砂を除去すると、標高2.25m付

近から、弥生後期の水田面が検出された。畦畔は確認されていない。水田面は、微高地状高まりに取り付く形で終わっている。水田耕土中から遺物は出土しなかった。

##### 微高地状高まり

古墳時代以降の遺構面で検出された西側の微高地状高まりは、水田面がその端部で終わっているところから弥生後期においてもなお存在していたと思われる。水田の調査と並行して少しづつ下げていったが、該期の遺構は確認されなかった。したがって水田面と対応する高まり上の面は不明である。図53の24・25層内には焼土粒が比較的多く混入し、また図57の土器片が第24層内から出土している。し

#### ○道路部分中調査区

道路部分東調査区より西へ110mのところに位置する。

ポンプ場本体部分からは、西南西へ約130m離れている。

調査面積は約45m<sup>2</sup>である。

#### 古墳時代以降

当調査区の東半分には、他の調査区において認められたのと同様、標高2.7m付近に弥生後期末の洪水砂が認められた。(第10~13層、図53) 西半分には、微高地状の高まりが認められた。洪水砂上には後述する溝が一条確認された。

#### 溝2

調査区東端で検出された溝状遺構である。長さは2.5m

以上確認された。幅は1.3m以上あると考えられるが、東側が調査区外であるため不明である。2段の掘り方を持ち、

1段目はほぼ南北にのび、2段目は北西から南東へのびる。

深さは約40cmをはかり、底部の標高は2.2m付近である。

断面は10cmほど緩やかに下がった後、30cmほど急激に落ち

る形態を呈する。埋土は3層認められ、レンズ状に堆積していると考えられる。検出当初は2条の溝が切り合っている状況を想定したが、埋土の堆積状況から1条の溝と判断した。(図55)

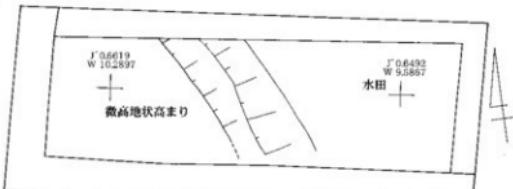


図56 道路部分中調査区弥生時代後期遺構面 ( $S = 1/100$ )



図57 第24層内出土遺物

かし土器片は摩耗が著しく流れ込みの可能性が高く、また胎土等の観察から水田の時期とは異なると考えられるところから、この層が該期の造構面である可能性は低い。

上記の弥生後期水田は、土壤、土層等から判断して、微高地を造成して形成されたものと判断できる。従ってこの微高地状高まりは、微高地の水田化されていない部分の末端であり、さらに西側に広がっていくものと考えられる。

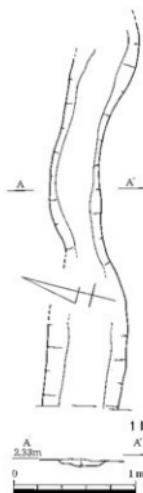


図59 溝3平・断面図 (S = 1/50)  
1層黄灰茶色粘質土 2.25m付近である。埋土は1層  
確認された。(図59)

本造構は35層の上に掘削されており、東側へ35層が下がつていくのにともなって消滅している。埋土中から遺物は確認されず、やや蛇行してのびているところから人為的に掘削されたものではない可能性がある。時期は弥生時代後期以前と考えられる。

#### 造構に伴わない遺物

35層から図60の土器が出土しており、胎土から弥生時代前期の範疇にあると考えられるが、表面がかなり摩耗しており、流れ込みの遺物と推測される。

#### ○道路部分西調査区

道路部分中調査区の西約110mのところに位置する。ポンプ場本体部分からは、西南西へ250mほど離れている。当調査区内は全面河道である。土層観察によると、第5層以下19層までが河道の堆積土

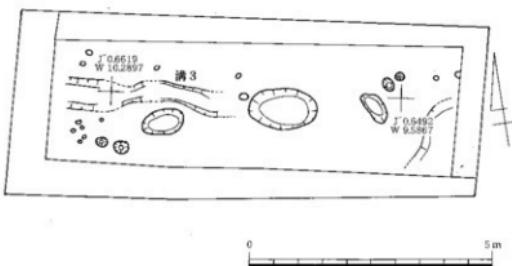


図58 道路部分中調査区弥生時代後期以前造構面 (S = 1/100)

#### 弥生時代後期以前

弥生後期末の造構面の下、東側では標高2.30m、西側では2.35m付近に、造構が疎らに存在する面を確認した。31・32・35層の直上に相当する面である。35層は西側が若干高くなっているが、土層観察によると、微高地状高まりはまだ形成されていない面といえる。造構は非常に浅いものがほとんどで、遺物も出土しないため、人為的に掘削されたものは少ないと思われる。

#### 溝3

調査区西側に検出された溝状造構である。幅は0.45m～0.64m、長さは3m以上検出された。断面は皿状を呈し、深さは約5cmである。底部の標高は



図60 造構に伴わない遺物  
確認された。(図59)

本造構は35層の上に掘削されており、東側へ35層が下がつていくのにともなって消滅している。

埋土中から遺物は確認されず、やや蛇行してのびているところから人為的に掘削されたものではない可能性がある。時期は弥生時代後期以前と考えられる。

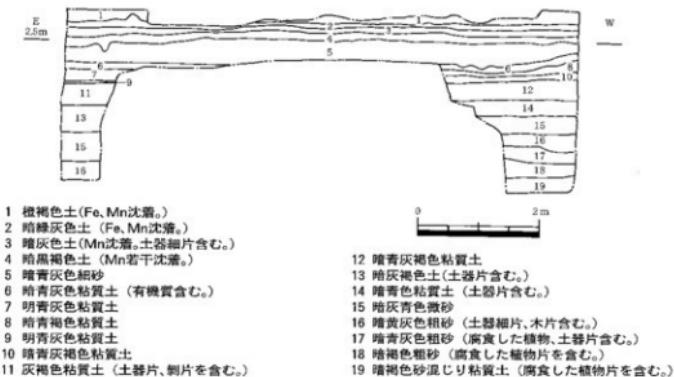


図61 道路部分西調査区南壁土層断面図(S=1/80)

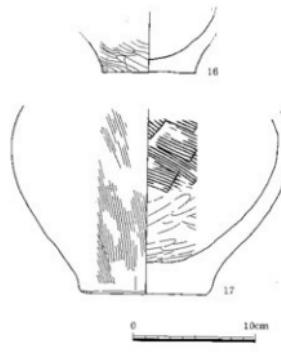


図62 河道出土遺物

と考えられるが、基盤層が確認されていないため、さらに深くなるものと考えられる。崩落の危険があったため19層以下は掘り下げていない。

堆積土内には土器片、サヌカイト片が若干検出された。図62の16および17は第13層から出土したもので弥生前期の範疇にあると考えられる。また9層からはS13のサヌカイトの割片が出土している。河道が埋没した時期は不明だが、少なくとも弥生前期以降であると考えられる。

河道の規模は、両岸が確認できなかったため、幅8m以上ということ以外不明である。周辺部の他の地点の調査から<sup>(注4)</sup>、北東から南西へのびる河道の一部と考えられる。

(註1) 百間川沢田遺跡高欄手調査区「島状高まり遺構17」(百間川沢田遺跡2百間川長谷遺跡2 建設省岡山工事事務所、岡山県教育委員会 1985)

(註2) 百間川沢田遺跡高欄手B調査区「土壠80・81・82・83・84」(註1前掲書)

(註3) なお高欄手調査区の西の横田調査区では弥生前期に属する同様の特徴を持つ遺構「土壠1・5」が検出されているため(百間川沢田遺跡3 建設省岡山工事事務所、岡山県教育委員会 1990)弥生前期の範疇に属する可能性もある。

(註4) 当調査区より400m北東の百間川沢田(市道)遺跡では弥生中期以前と考えられる水田層の下から、北北東から南南西へのびる河道の東岸が検出されている。(百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告 岡山市教育委員会 1992)また400m北東の百間川沢田遺跡高欄手B調査区からは調査区の西端から绳文時代晚期の時点では、低湿地化している河道が検出されている。(註1前掲書)

出土土器観察表

器形	番号	法量(cm)			備考・特徴	出土
		口径	底径	器高		
高 壺	1	19.6			残存状況口縁1/10。胎土は緻密。外面黄灰色。内面赤色。調整内外面ともヘラミガキ。	水田 2
壺 か 甕	2		7.4		残存状況底部1/2。胎土是比较的密。外面赤褐色。内面淡黄灰色。	水田 4
甕 か 壺	3		6.4		残存状況底部1/5。胎土中に0.5~1mmの砂粒、長石、石英多。外面明瞭赤色。内面灰黄色。内面縱方向のヘラケズリ。	P 7
甕 か 甕	4		6.0		残存状況底部1/3。胎土中に0.1~1mmの白色砂粒、雲母片含む。外面赤褐色。内面黄灰色。外面部にユビオサエ。内面縱方向のヘラケズリ。	P 10
壺	5	15.0			残存状況口縁部1/3。胎土中に1~2mmの砂粒多く含む。長石粒含む。外面、内面ともに淡黄白色。	P 11
高 壺	6	15.0			破片。胎土緻密。石英粒少量混じる。外面赤褐色。内面乳黄色。焼成良好。	大 県 盛土直下
壺 か 甕	7		9.6		残存状況底部破片。胎土内石英粒多量。外・内面暗褐色。焼成良好。	大 県 盛土直下
甕 か 甕	8		11.0		残存状況底部破片。胎土中に2mmほどの砂粒、石英粒少量混入。外面黄灰色内面暗褐色。焼成良好。	大 県 盛土直下
深 鉢	9	22.8			残存状況口縁部1/6。胎土中に石英粒多量。外面褐灰色内面橙灰色。内・外面ヨコヘラミガキ。焼成良好。	P 13
深 鉢	10	15.6			残存状況口縁部破片。胎土中に石英粒。外面暗褐色。内面暗褐色。外面上半ヨコヘラミガキ。下半ヨコナデ。内面上半ヨコヘラミガキ。下半ヨコナデ。焼成良好。	P 13
深 鉢	11	32.0			残存状況口縁部破片。胎土中に砂粒多。外面褐色。内面褐灰色。内・外面ともにヘラミガキ。焼成良好。	55~58 層上
土 詞 質 橢	12		7.4		残存状況高台部分1/4。胎土内に白色微砂粒若干混入。外面乳黄色。内面淡乳色。焼成良好。	洪沢砂 上 面
土 詞 質 橢	13		6.4		残存状況高台部分1/4。胎土緻密。外面明黄色。内面黑色。内黒土器。焼成良好。	洪沢砂 上 面
甕 か 壺	14		7.6		残存状況底部1/6。胎土内砂粒、長石粒多量。外面明瞭褐色。内面暗褐色。焼成良好。	24層内
甕 か 壺	15		7.6		残存状況底部1/4。胎土中砂粒、石英粒多量。外面乳赤色。内面淡灰色。焼成良好。	35層内
甕 か 壺	16		7.6		残存状況底部1/2。胎土中砂粒、石英粒少。外・内面淡灰褐色。外面脚部ヘラミガキ。脚部と底部の境ユビオサエ後ヘラミガキ。底部ヘラミガキ。内面ナデ。焼成良好。	13層内
壺	17		10.5		底部残存。胎土内0.5~2.0mmの長石、石英粒多量。雲母片含む。外面浅黄色。内面灰黄色。外面ハケメ後ヘラミガキ。内面ハケメ後ナデ。焼成良好。	13層内

出土石器観察表

器種	番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	材質	出土
石 鐵	S 1	2.0	1.35	0.2	サスカイト	島状高まり1
石 鐵	S 2	1.95	1.2	0.2	サスカイト	島状高まり5
石 鐵	S 3	2.2	1.25	0.2	サスカイト	洪水砂直下
石 鐵	S 4	1.7	1.1	0.2	サスカイト	洪水砂直下
剥 片	S 5	2.6	2.7	0.25	サスカイト	P 6
剥 片	S 6	3.3	2.75	0.35	サスカイト	弥生後期～前期面
剥 片	S 7	4.4	3.0	0.45	サスカイト	弥生後期～前期面
剥 片	S 8	5.5	3.7	0.95	サスカイト	弥生後期～前期面
剥 片	S 9	5.6	4.8	1.6	サスカイト	弥生後期～前期面
石包丁	S 10	9.7	4.0	0.95	サスカイト	弥生後期～前期面
剥 片	S 11	2.0	1.7	0.1	サスカイト	弥生前期以前面
剥 片	S 12	3.85	2.5	0.2	サスカイト	P 1
剥 片	S 13	5.3	3.2	0.95	サスカイト	9層

## 第3章　まとめ

今回の調査地点は、百間川沢田遺跡の範囲の西端に位置し<sup>(1)</sup>、百間川沢田遺跡高縄手調査区（昭和52～56年岡山県教育委員会により調査）で確認された操山丘陵に近い微高地<sup>(2)</sup>の南側に相当すると考えられる。この微高地の西側には、百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区から<sup>(3)</sup>、百間川原尾島（市道）遺跡を経て<sup>(4)</sup>、道路部分西調査区へと至ると推測される弥生前期以前の河道が確認されている。また東側には百間川沢田遺跡高縄手A調査区において確認された、北東から南西方向の、ポンプ場本体部分の東側にのびてくると推測される弥生時代以前の河道<sup>(5)(6)</sup>が位置しており、この微高地は、これら二本の河道の冲積作用により形成された三角州状の微高地と考えられる。今回の調査地点は、この微高地が操山丘陵北麓の低位部に向けて傾斜する部分の末端に位置すると推測される<sup>(7)</sup>。

遺物は、縄文晩期から、弥生前期、中期、後期を中心として、古墳時代、古代、中世の遺物も僅かに出土している。主要な遺構は、弥生後期末葉におこった洪水による洪水砂に埋没した弥生後期の水田遺構であり、その他弥生時代後期～縄文晩期に属すると思われる溝を中心とする遺構が検出されている。古墳時代以降の遺構は、近現代の土壌や溝を除いて、明確な物はほとんど確認されなかった。遺構および遺物については、第3節で述べたが、ここでは時期別に簡単にとりまとめておく。

縄文時代は、遺物は各調査区から、突帯紋土器および原下層式の晩期の範囲に属する物が僅かに見つかっているが、遺構に伴う物はほとんどなく、表面の摩耗が著しい個体が多い。これらの遺物は、縄文晩期の遺物、遺構が確認されている本調査地点北側の微高地上<sup>(8)</sup>からの流れ込みである可能性が高い。該期の遺構面にみられるピットは、不整形な掘り方をもつ物が大多数で人為的に掘削されたと考えられる遺構は皆無である。このことは該期の遺構として掲載したP13にもいえることであり、出土した遺物も流れ込みの可能性があり、この時期当調査地点は、人の手が及んでいなかった可能性が高いと考えられる。

弥生時代前期から後期に属する遺物は、各調査区から少量ずつ見つかっているが全体の数量は少ない。遺構は溝を中心とし、ピットは多く確認されているが、遺物を伴う物は少ない。

検出された溝は、大半が後に造成される、弥生後期の水田畠畔と同様の方向にのびることが確認されており、また水田耕土が溝内部に落ち込んでいる状態も観察されているため、基本的に後期末に洪水により埋没した水田の造成に関連した、後期の範囲にある遺構であると考えられる。

確認されたピットは、時期を明らかにする遺物を伴うものはほとんどないが、周辺で出土した土器が前期～後期の様々な時期が混在している状況を呈していることや、また検出状況や埋土から、複数の時期のピットが混在すると考えられる。

いずれの遺構も後期の水田造成に伴って削平されたと考えられ、遺存状態がわるく、性格を推測するのは困難である。しかし平面形は不整形で、断面形も緩やかに下る形状を呈している遺構が多く認められることから、人為的に掘削された遺構はかなり限られてくると考えられる。調査地点周辺部における、弥生前期～後期前半にかけての各期の集落は百間川沢田（市道）遺跡<sup>(9)</sup>、百間川原尾島遺跡<sup>(10)</sup>などで確認されており、その集落周辺部の微高地上では、弥生後期水田の造成が行われるまでは、弥生時代各期の溝群を中心とする遺構が広がっていることが確認されている。当調査地点でも同

様の状況を呈しており、当調査地点が集落の中心から外れた微高地に位置していることを示していると考えられる。

弥生時代後期水田造構は、本体部分、配管部分、および道路部分東調査区、中調査区において、弥生後期末の洪水砂に埋没した状態で確認された。確認された水田は、すべて微高地を切り下げて造成された水田である。水田の区画については、本体部分では一辺5~8mの小区画水田であることが確認された。配管部分及び道路部分東・中調査区においては、調査区の幅が狭いため水田一枚の範囲が確定されないが、微高地を切り下げて造成されていることから、おそらく本体部分と同様小区画水田が存在していると考えられる。

ポンプ場本体部分では800m足らずの調査区の中に、5カ所の円形から楕円形を呈すると考えられる島状高まりが所在し、その間に水田が形成されている状況が明らかになった。これは本体部分の北約300mに位置する、百間川沢田遺跡高縄手A調査区の微高地南側や<sup>(註1)</sup>約30m北側<sup>(註2)</sup>と同じ状況を呈している。このことから高縄手A調査区の微高地南側から、本調査地点までの約300mの間は、円形から楕円形の島状高まりの密度が、周辺部の該期の水田造構のそれと比較してかなり高い地帯と考えられ、特徴のある水田景観を呈していたと推測される。この景観の示す意味は、今後の検討課題であろう。

水田造構以外は、道路部分西調査区では河道が、配管部調査区の東端では低位部が確認された。配管部調査区で確認された低位部において、該期の水田が営まれていたかどうかは、不明である。しかし、暗灰褐色粘質土（第16層）が水平堆積をしており、該期の水田層の可能性もあるがここでは保留しておく<sup>(註3)</sup>。

耕作面の標高は、検出されたすべての調査区で、2.25~2.20mをはかり、上記高縄手A調査区の微高地南側の水田よりも約20~40cm低い値を示している。このことから当調査地点は、高縄手A調査区の微高地を最高所とし、南側に傾斜する微高地に位置していると考えられる。百間川原尾島遺跡では、弥生後期中葉以降、低位部から微高地縁辺、さらに微高地へと順に水田開発が行われた過程が確認されている<sup>(註4)</sup>。この過程が当調査地点周辺の水田開発にも当てはまるならば、当調査区の水田は高縄手A調査区の微高地南側の水田に先行することも考えられるが、今回水田開発の過程を明らかにすることはできなかった。

古墳時代以降は、弥生後期末の洪水砂上に検出されている時期不明の溝を除くと、近～現代の溝以外は明確な造構は認められない。基本的には弥生後期末の洪水砂の上面は、どの調査区においても水田耕土と思われる粘質土が、何層も堆積している状況を呈しており、従って今回の調査地点は弥生時代後期以降現代に至るまで、水田が連続して営まれていた地点と考えられる。

（註1）『改訂岡山県遺跡地図 第六分冊 岡山地区』 岡山県教育委員会 2003

（註2）『岡山県埋蔵文化財調査報告10 姫川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』 岡山県教育委員会 1980による第2微高地である。

（註3）『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告50 百間川原尾島遺跡2』 岡山県文化財保護協会 1984

（註4）『平成4(1992)年埋蔵文化財発掘調査速報資料』『原尾島(市道)遺跡』 岡山市教育委員会 1992

（註5）『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 百間川長谷遺跡2 沢田遺跡2』 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1985

（註6）註2前掲書では弥生前期以前の河道、註3前掲書では弥生前期に埋没した河道、註4前掲書では弥生前期以前の河道と記載。

（註7）現在の地形、標高および付近の水流の方向から、道路部分西調査区の河道は字大砂場付近で向きを変え、樺山丘陵の北麓にそって東流し米田方面へ延びる可能性が考えられる。

- (註8)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 百間川沢田遺跡3』岡山県教育委員会 1993
- (註9)『百間川沢田(市道)遺跡』岡山市教育委員会 1992
- (註10)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告68 百間川原尾島遺跡3』岡山県教育委員会 1994
- (註11)註10前掲書
- (註12)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46 百間川沢田遺跡1』建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1981による、第1・2・3調査区。
- (註13)註12前掲書第2調査区から、当調査区の低位部に該当すると思われる低位部に該期の水田層の可能性がある粘土層が2層検出されている。
- (註14)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告153 原尾島遺跡 沢田遺跡 一般国道2号藤原交差点地改良に伴う発掘調査』建設省岡山国道工事事務所 岡山県教育委員会 2000

主な参考文献

- 工業普通「水田と堆」『弥生文化の研究2生業』雄山閣 1968
- 神谷正義「最古の水田」「吉備の考古学的研究」山陽新聞社 1992
- 根木修「水稻農耕の梗概」「吉備の考古学的研究」山陽新聞社 1992
- 平井勝「縄文時代」「岡山県の考古学」吉川弘文館 1987
- 田嶋博之「水田の登場」「古代史後元4 弥生農村の誕生」講談社 1989
- 下澤公明「弥生時代後期末の吉備南部の社会について」『古文化論叢第45集』九州吉文化研究会 2000

# 報告書抄録

ふりがな	ひゅっけんがわさわだいせき							
書名	百間川沢田遺跡							
副書名	原尾島ポンプ場建設に伴う発掘調査							
編著者名	河田健司							
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化財課 岡山市埋蔵文化財センター							
所在地	<p>〒700-8544 岡山市大供1丁目1番1号 TEL 086(803)1000          〒703-8284 岡山市網浜834番1号 TEL 086(270)5066</p>							
発行年月日	平成16年(2004)3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
百間川沢田遺跡	岡山県岡山市沢田 37-1他	33201		34° 39' 40"	133° 57' 38"	1992.9 1993.3	1050m <sup>2</sup>	ポンプ場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
百間川沢田遺跡	生活跡 水田跡	縄文 弥生		土坑 溝 水田畦畔	縄文・弥生 土器 石器		弥生後期の水田・ 島状高まりを確認	



調査区遠景  
(北西から)



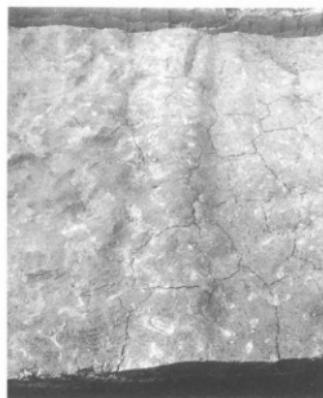
調査前の状況  
(配管部分西から)



作業風景  
(北から)



弥生後期末水田検出状況  
(本体部分 東から)



水田畦畔検出状況  
(配管部分 北から)

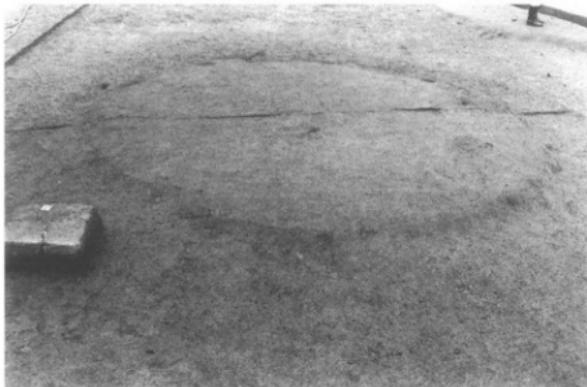
弥生後期末水田面 (手前は近・現代水路)  
(配管部分 東から)



弥生後期末水田面  
(本体部分 東から)

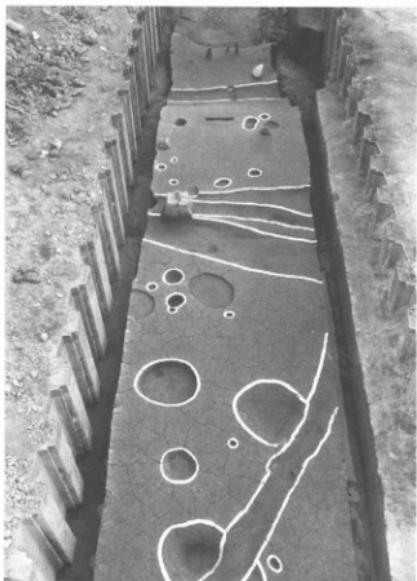


島状高まり 4 盛土状況  
(南から)



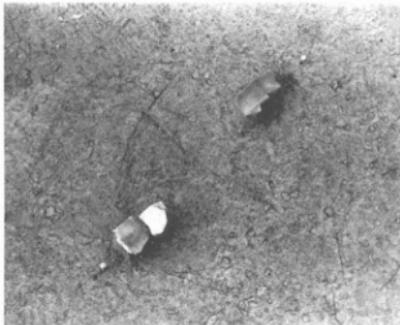
島状高まり 4  
基盤削り残し状況  
(南から)

図版 4





弥生前期以前遺構面  
(本体部分 西から)



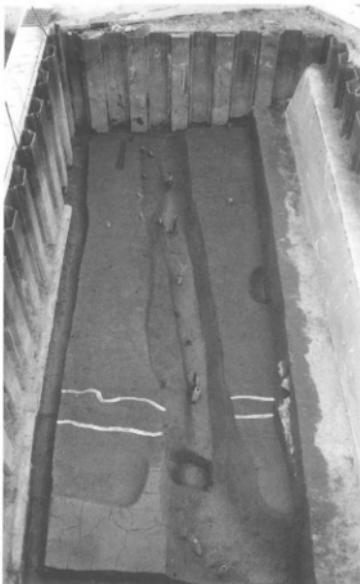
縄文土器出土状況



土層堆積状況  
(本体部分 東から)

図版 6

弥生後期末水田面  
(道路部分東調査区 西から)



弥生後期末水田面  
(道路部分中調査区 東から)



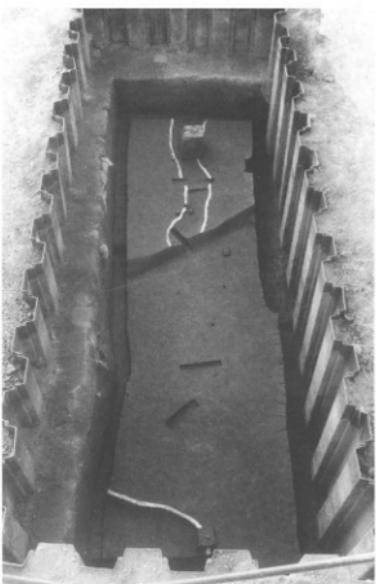
溝 1 堀り上り状況  
(道路部分東調査区 西から)



溝3掘り上がり状況  
(道路部分中調査区 東から)



弥生前期以前遺構面  
(道路部分東調査区 西から)



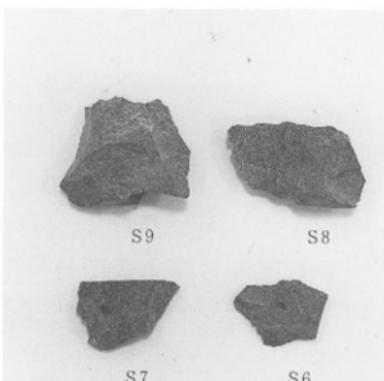
河道部分埋土堆積状況  
(道路部分西調査区北から)



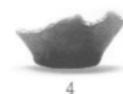
石包丁



石鎌



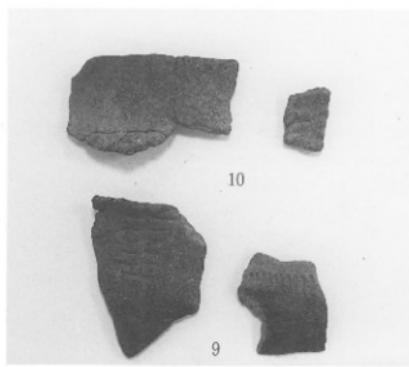
剣片



弥生土器



弥生土器



縄文土器



河道内出土土器

百間川沢田遺跡  
—原尾島ポンプ場建設に伴う発掘調査—

平成16年3月31日

編集 岡山市教育委員会文化財課

岡山市埋蔵文化財センター

発行 岡山市教育委員会

印刷 片山印刷株式会社